魔法少女リリカルなのはStS～神々の遊び～

混沌の使者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔＳ～神々の遊び～

【Ｎコード】
Ｎ９５５１Ｒ

【作者名】
混沌の使者

【あらすじ】
ここは神界と呼ばれる地。
神々が犇めく世界。
その世界から一人の神が次元世界に降りたった。
これはその神となのはキャラ達との物語。

皆さん、良ければ暇潰しにでもどうぞ♪

※只今、執筆を止めています。復活の期限が延びました。1月辺りを目処にしています。

第一話　どうして僕が……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

薄暗い通路。
そこに光が生まれ、その光から、人――少年が出てきた。

「ここは……？」

少年は独り呟き、辺りを見渡す。しかしあるのは、人の入った試験管が所せましと並んでいた。

「何だこれ？　人……？　何でこんなものの中に……？」

不思議に思いながら、少年は試験管に触れる。すると奥の方で、ガタッという音がした。
少年は何だろうと思い、目を凝らし奥を見る。

「な……なに……あれ……？」

そこにいたのは、丸みを帯びたボディの機械。その機械は少年を

見つけると、中央にある目のようなコアを光らせ、何かを撃ってきた。

「うあっ！」

少年は咄嗟に避ける。床に当たった光は、床を焦げさせた。
少年はそれに冷や汗を垂れ流し、スッと機械に背を向ける。
そして――

「お邪魔しましたーー！！」

そう叫んで、一気に後ろへ爆走！
機械はその少年を追って、動き出した。

「何で追ってくるのー！　くっ……！　こうなったら――『創造（クリエイト）』！」

少年がそう発言すると、追ってきた機械の下から、“のぼり棒”が現れ、機械を串刺しにする。ちなみに“のぼり棒”とは、小学校でやった棒のぼりに使ったであろう棒のことだ。

「や……やった……？　やったぞ！　ハハハ、僕だってやれば出来るんだ！」

少年は誇らしげに、仁王立ちしながら、そう言う。しかし――

「……えぇ～……」

奥からさらにいっぱいの機械が、出現した。

「うわ～～！！」

少年は再び、後ろを向いて、涙目になりながら爆走！

何で僕こんなことになってんのーー！！

心の中でそう叫ばざるを得ない少年だった。

さて、何故少年がこんな目に遭っているのか？
それは――

「この次元世界破壊しねぇ？」

こんな発言で始まった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ここは神界と呼ばれる地。様々な神々が住み、平和に暮らしている。

「この次元世界破壊しねぇ？」

前言撤回――平和ではないです。案外物騒でした。

そして、今発言したのは“太陽の神”。橙色の髪の若い男――見た目21歳前後――背中からは太陽を模した何かが、覗いてる。

「確かにいつの間にか次元世界では、魔法などという異能の力が蔓延（はびこ）っとるようだしのぅ」

“太陽の神”に同意するように“風の神”が発言する。翠色の髪をしたじじい――見た目67歳前後――何故か髪や服が常にそよいでいる。原理はわからないが。

「いけない。いけないなぁ。僕ら神は人間を愛してこそ神じゃない

か？」

「それはお前だけにゃろうが。小生達まで巻き込むにゃ」

先の二人の意見を否定するように、桃色の髪の若い男――見た目１９歳前後――髪をかきあげて、自分に酔っている雰囲気だ。ナルシストなんだろう。こいつは“愛の神”だ。

その“愛の神”の言葉を否定するのは“猫の神”。黒い毛皮で２ｍクラスの猫。きちんと両足で立っている。

「でもでも～“愛の神”が言うように～破壊するのは早計じゃな～い♪」

今度は“愛の神”に、同意するように発言したのはロリ～な“ロリコンの神”。金髪のツインテール少女――見た目６歳前後――元気一杯で活発そうだ。

「だったら、次元世界の方に我らの目を送り込んだら、どうかね？」

「うおっ！？　出てくんな！　くせぇだろ！」

急に和式便器から顔を出し、発言したのは“トイレの神”。白髪のじじい――見た目８０歳前後――何だか所々汚れている。

さらに発言したのは“紙の神”。ボーイッシュな黒い髪のお姉さま――見た目２５歳前後――どうにも野蛮な感じだ。

「ですが良い案ですね。私達の目を送ってみましょうか」

“トイレの神”に賛同したのは“眼鏡の神”。茶髪の男性――見た目２８歳前後――眼鏡を掛けていて知的そうだ。

「だったら僕の系列に新人の子がいてね。その子にやらせてはどうかな？」

すると“愛の神”が、服をバッと脱ぎながら、ポーズを決め、そう発言する。ちなみに特に脱いだのに意味はない。

“眼鏡の神”は少し考え――「まあいいでしょう」――と言い、“愛の神”は話にあった神を呼び出す。

「呼びましたか？」

そこに一人の少年が訪れた。純朴そうな少年で見た目１５、６だろうか。紅い瞳に蒼い髪をしている。格好もそこらへんにいるような、少年の格好だ。

「よく来てくれたね“遊愛（ゆうあい）の神”。みんな、彼はまだ１０８年しか神の任期に就いていなくてね。経験を積ませるためにも、行かせてやりたいのだが？」

“愛の神”はとうとう上半身裸になり、両手を広げ、天を仰ぎ見ながら言う。

「まあいいぜ。おら、来いよ“遊愛の神”」

「はあ？」

そんな“愛の神”を軽くスルーし、“遊愛の神”を呼び寄せる“太陽の神”。きっと神々の中では、日常茶飯事なのだろう。誰も気にしていない。

呼ばれた“遊愛の神”は、よくわからないまま“太陽の神”に近づいていく。そして“太陽の神”の前まで辿り着く。

すると、“太陽の神”は人差し指を“遊愛の神”の額に当てる。その瞬間、指と額が光だす。

「汝に名を与える。名を“ユアン”。地上の目としての役目を果たせ」

「へ？　えっ！？」

急に光が溢れだし、“遊愛の神”を包み込む。最後に“遊愛の神”が見たのは、神々がハンカチを振って、見送っている姿だった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そんなこんなで今に至る。

無茶苦茶だーー！！

少年――“遊愛の神”であるユアンは、そう心の中で叫びながら、機械の攻撃を避け、逃げていく。

そこに一筋の光明が見えた。それは文字通り光。

「出口だ！」

その光を地上の光だと思い、ユアンはさらにスピードを上げ、光指す場所に向けて、全力疾走ならぬ全速疾走で駆ける！

だがどちらでも、全速力で疾走してるのに変わりはない！

やった。やっと出られる。そうだこれはきっと夢だ。あの光を抜けたら、きっといつもの日常が戻ってくるんだ。

あと三歩。

抜――。

あと二歩。

け――。

あと一歩。

たーー！！

「プラズマランサー！」

「――って、どわぁあ！！」

ユアンに黄色い閃光が襲い、それをユアンはギリギリで避ける。

その瞬間、ユアンと黄色い閃光を放った人物の目が合う。

「「ひ、人！？」」

すると同じ感想で驚いた。

「こんな所で何をしている！」

閃光を放った人物――金髪でツインテールの女性で、何だか少し過激な服を着ている――は、人だと判断すると、機械的な杖をユアンに向けて、そう言う。

「わわっ！？　ま、待って！？　待ってください！？　違うんです！　全然怪しいものじゃないんです！」

と、ユアンは焦りに焦って、怪しいとしか思えない台詞を吐く。金髪の女性は怪しいと思ったが、あまりの相手の慌てように、逆に悪い人じゃない？　とも思う。

そんな中、ユアンが出てきた通路から、再び機械が現れた。

「また来た！？」

「ガジェット……！　あの子を捕らえてください。私はガジェットを倒します！」

金髪の女性は周りにいた、統一した服装の者達に、そう言って自分は機械――ガジェットに立ち向かった。

「大人しくしてください。大人しくしてくだされば危害は与えませ

ん」

「は、はい……」

金髪の女性がガジェットに向かった後、ユアンは周りを囲まれ、さらに目の前の女性――機械的で、トンファーのような持ち方の双剣を持った――にそう言われ、ユアンは両手を挙げて、投降の意を示した。

そして、ユアンは見張りをつけられ、さらに手足にバインドをかけられ、ぼーっとしていた。

「すまなかったね。手荒な真似をして」

そこに見張りに通されて、一人の男性――緑髪で、何だか軽薄そう――が、話しかけてきた。

「……えと……？」

「ああ、ヴェロッサだよ。ヴェロッサ＝アコース」

「……ユアンです」

お互い自己紹介を終えたところで、ヴェロッサと名乗った男性は、ユアンの隣に座り込む。

「あの……何かあったんですか？」

ユアンが慌ただしく動き回る人間達を見て、そう尋ねる。あの金髪の女性もどうやら、あの機械を倒し終えたようで、周りの者達に、指示を飛ばしている。

「……君は今の状況を知らないんだね。すまないが、仕事柄、今の状況はちょっと説明出来ないんだ。ただ一言だけ。事件は終わってるから、心配することはないよ。今はただの事後処理だから」

「そうですか。それよりいいんですか？　仕事中なんじゃ？」

「僕はいいんだよ。サボるのが仕事だからね」

「そんなわけないでしょう？」

「ハッ！」

後ろから響いた鬼の声に、ヴェロッサは体を硬直させる。

「シャ、シャッハ……」

「来なさい。こちらで手伝ってもらいます」

ヴェロッサはそのままシャッハと呼ばれた女性――先程の双剣を持った。今は修道服のようなものを来ている――に、引きずられて、どこかに行ってしまった。

……やっぱり夢じゃなかった……。はぁ……地上の目か……僕はただ遊んでいたいだけなんだけどな……。ていうか、別に僕じゃなくてもいいじゃないか。他に次元世界に行き慣れてる神が、一杯いるのに。どうして僕が……。はぁ……暇だな……『創造（クリエイト）』。

ユアンはそう思いながら、手にけん玉を創造し、バインドをされながら、立って器用にけん玉をし出した。

そんな急にけん玉を始めたユアンを、見張りの者は、注意しようとしたが、あまりの妙技に目を奪われてしまった。というよりも、珍しいものだったから、気になっただけかもしれないが。

ユアンはそんな視線を気にせず、妙な技をしながら、小皿や大皿、中皿、けん先とはめていく。

ほんとに何で僕なんだ。僕なんて、神の任期に就いて、まだ１００年ちょっとしか経ってないのに……。

「あの……」

大体横暴なんだよな“愛の神”は。理由を聞いたって――「美しいから」（服を脱ぎながら）――しか言わないし。はっきり言って

意味わからない。

「あの……！」

何だかムカついてきた。ああもうなんで僕が……！

「あの！」

「うわぁ！！？」

ユアンは大声に驚いて、後ろに倒れそうになる。しかも、バインドをされているせいで、足に踏ん張りが効かない。

倒れる……！

ユアンはそう思い、目を瞑る。

しかし――衝撃は来ず、代わりにふよっとした感覚が、ユアンを包み込んだ。

「むぐっ……」

「ごめんなさい。大丈夫？」

ユアンはどうやら、たわわに実ってしまった二つのメロンに、挟まれていたようだ。つまりは抱き抱えられていた。あの金髪の女性に。

「むむっ……！」

「あ、暴れないで……！　今、足のバインドを外すから」

ユアンはそれに焦り、離れようと暴れるが、金髪の女性はこのまま離れるとまたこの少年は、倒れてしまうため、足のバインドを外すまで、待つように言う。

そして、ユアンの足のバインドが外れ、ユアンは急いで、金髪の女性から離れる。

「あ、あの……？」

「大丈夫です。大丈夫ですから」

ユアンは離れると金髪の女性に背を向ける。金髪の女性は、どうしたのか心配になり、尋ねる。ユアンはバクバクと鳴る心臓を抑えながら、答える。ユアンは結構シャイなのだ。

「そ、それじゃあ一緒に来てくれる？　聞きたいことがあるから」

「はい……」

ユアンは何とか落ち着いて、金髪の女性についていく。

「あ、自己紹介がまだだったよね。私はフェイト。フェイト＝Ｔ＝ハラオウン」

そうして“遊愛の神”――ユアンの物語が、始まりを告げた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ここは神々が犇めく神界と呼ばれる地。

「てめぇはわかってねぇ」

「わかっていないのは貴様だろう」

何だか険悪な雰囲気である。いがみ合ってるのは“太陽の神”と“月の神”。ちなみに“月の神”は黒い長髪の若い男――見た目２１歳前後――背中には月を模した何かが覗いている。

「とことんてめぇとは合わねぇなぁ……！」

「合いたくもないがなぁ……！」

二人は額をぶつけ合い、今にも喧嘩に発展しそうだ。どうなってしまうのか……！

「王道の金髪巨乳に決まってんだろうが！！」

「シスターの包容力に敵うものなどあるものか！！」

って、何の話してんだごらぁ！！　と、突っ込んだのは私だけではないはずだ……！

大体王道なのか？　それにシスターだからって、包容力があるかわからんだろうに。

「待つんだ君たち！　その二つを愛してこそ真の愛が――」

「「うるせぇ！　入ってくんな！」」

その二人の間に入った“愛の神”の発言は、一瞬でかき消された。

その後も“太陽の神”と“月の神”の口争は続いた。

「私は私は～あのお兄ちゃんが良かったな～♪　カッコ良くて～♪」
「あんな優男がかぁ？　変な趣味してんなぁ」

こっちで話しているのは、ロリ～な“ロリコンの神”とお姉さまな“紙の神”。こっちも何の話してんだか。

「待つんだ！　僕はそれでも愛そう！　性別を越えて、愛してこそ真の愛――」
「「黙ってて～♪／黙ってろ！」」

再び間に入った“愛の神”の発言は、無惨にもかき消された。

ここは神々が犇めく地。
のはずなのだが、自信がなくなってきた。
しかし、ここが神々が住まう神界なのだ。神界のはずなのだ。

この物語は、この神界となのは達の世界が交わる話。
“遊愛の神”――ユアンはどうなるのか？
神々の遊びはまだ始まったばかりだ。

第一話　どうして僕が……（後書き）

初めまして混沌の使者です。

皆様どうでしたか？

色々意見があるでしょうが、これが私が考え抜いた神が絡む話です。

よろしかったら感想、評価お待ちしてます♪

第二話　僕は“愛の神”が苦手だ……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

……そういえば、何て言えばいいんだろう？

“遊愛の神”――ユアンは金髪の女性――フェイトに連れられながら、そう考える。ちなみにフェイトは、最初に会ったような、多少過激な服ではなく、茶色い制服のようなものを来ている。

神界から来た……って言っても、わからないだろうし、どう言おう？

〈あー、あー、聞こえるかい？　ユアン君？〉

「え！？」

「キャッ！？」

ユアンは急に頭に響いた声に驚く。そのユアンの驚いた声に、フェイトが驚く。

ユアンは――「すいません何でもないです」――と言い、その場を切り抜ける。

〈ハハハ、すまないね、いきなり。これは“神話”と言ってね。君と僕の愛の――〉

〈それで何のようでしょうか“愛の神”？〉

〈つれないねまったく。まあいいよ。回線は繋いでおくから、危ないときは助けよう〉

〈そいつはどうもです〉

そんな話をしていると、どうやら目的地についたようだ。

と、思いきや少し違ったみたいだ。何か転送装置だかなんだかで、どこかに飛ばされた。

ユアンが話を聞くと、どうやらここは、管理局艦船アースラというらしい。そうしてアースラの中をしばらく歩くと、部屋に連れ込まれた。

そこには中央に机があり、向かい合って椅子がある。つまりは取調室だ。ユアンとフェイトは椅子に座る。

「それで、あなたはどうしてあそこにいたんですか？」

「え……と～……」

〈さっそく助けが必要なんだねユアン君〉

〈いりません〉

〈そうか必要か！　わかった、なら僕の言うことに続いて言うんだ！〉

〈僕の話聞いてましたか！？〉

なんとも強引な“愛の神”に脱力しながら、確かにうまい言い訳は、浮かばないなと思い、“愛の神”に任せることにした。底知れぬ不安を抱えながら。

〈僕は〉

「僕は」

〈貴方という〉

「あなたという……」

〈美しい方と会うためにいたのです！〉

「美しい方と会うために――って、何でだよ！」

あまりの予想ＧＵＹな話に、思わず自分で突っ込んでしまったユアン。それにフェイトは少し怒り顔になる。

「ちゃんと答えてください。あなたは悪そうな人には見えないです

けど、あんなところにいた以上、理由くらいは聞かないといけませんので」

「ご、ごめんなさい……」

ユアンはそれに縮こまって、素直に謝る。

「あの……ですね……実は……その……迷ったんです！」

ユアンは迷って迷って、何とも苦し紛れな答えを導き出した。何だか奇妙な沈黙が辺りを包み込む。

「……え……と……本気ですか？」

本当の間違いじゃ？

と、ユアンは一瞬考えたが、自分でも嘘臭いことは、わかっていたので、何とも言えない。

「うぅ……その……」

〈ユアン君！　ピンチなんだね僕が――〈回線を貸しなさい。私が指示を出します〉――何をするんだ“眼鏡の神”！〉

急に再び“愛の神”から、神話が来たと思ったら、“眼鏡の神”に回線が変わった。

〈私の言うことに続いて言いなさい。こほん、すいません正直に話します〉

「すいません正直に話します」

ユアンは“眼鏡の神”なら、信用できると安心して、言葉を続ける。

フェイトはやっと、ちゃんと話してくれる気になってくれて、安心する。

〈実は僕〉

「実は僕」

〈捨てられたんです〉

「捨てられたんです」

「！？」

ユアンがそう発言すると、フェイトが驚いたように、顔を歪ませ

る。

〈僕の力は気持ち悪いらしくて、１０歳の頃捨てられたんです〉

「僕の力は気持ち悪いらしくて、１０歳の頃捨てられたんです」

「……」

〈それで5年間、ずっと住む場所を探してて、何か丁度良さそうな、建造物があったから……つい……〉

「それで5年間、ずっと住む場所を探してて、何か丁度良さそうな、建造物があったから……つい……」

「……」

ユアンは黙って、聞いているフェイトの顔を窺う。少し無理があるんじゃとユアンは思うが、中々良い言い訳だとも思う。

「そう……だったんだ。ごめんなさい。辛い話をさせて」

「い、いえ、そんなこと……」

〈実際気持ち悪い力ですし〉

「実際気持ち悪い力ですし」

「もし、そうだとしても……子供を捨てるなんて……」

フェイトは子供時代に、親に捨てられて――というのは語弊があるが、そういう目に遭っている。だから、そういう子供は放ってはおけない性格になっている。

〈気にしないでください〉

「気にしないでください」

「でも……！」

〈また〉

「また」

〈愛を探す旅に出るだけだから！〉

「愛を探す旅に出るだけ――って、おい！？」

急に“眼鏡の神”から、“愛の神”に回線が代わり、出鱈目（でたらめ）な発言になった。

そして、急に一人突っ込みをするユアンを見て、フェイトは堪えきれず――「あはは」――と、笑った。

「不思議な人。ねぇ？　良かったら、機動六課に来ないかな？　保

護観察って形なら、入れると思うんだ。ちゃんと部屋もあるよ。あなたの親も探せると思う」

〈了承しなさい〉

「は、はい。喜んで」

フェイトは、こんな話を聞いて、このまま放って置くわけにもいかず、それなら近くに置いておこうと思い、起動六課に誘った。まあ、少し気になったというのもあるだろうが。

ユアンは再び代わった“眼鏡の神”に言われて、了承した。ちなみに回線の奥で――「何をするんだ“眼鏡の神”！　僕が愛を――」――何て言葉が聞こえた気がするが、多分気のせいだと信じたい。

そんなユアンを尻目に、フェイトはどこかに通信を開き、どこかに連絡している。

〈よくやりましたねユアン〉

〈どうも、援助感謝です〉

“眼鏡の神”が神話で、ユアンを労う。ユアンは少し疲れた風に感謝を述べる。

〈いやいや、しかし、やはり人間は情に弱いものですね。簡単なものです〉

〈そうかもしれないですね〉

〈何を言うんだ！　情とは、正に愛情！　愛情とはつまり愛！　そして愛とはぼ――〉

〈――うざいんで下がってください〉

途中から入ってきた“愛の神”の言葉は、ユアンの無情な言葉にかき消された。

「それじゃあ来て……えと……そういえば名前聞いてなかったね……私ったら……」

フェイトは思ってみれば、名前を聞いてなかったのに、恥ずかしいと思い、顔を伏せる。本来ならば、一番最初に聞くはずなのに。まあそれほど今という状況は、混乱を極めているのだろう。

ユアンは苦笑いをし、自己紹介をして、フェイトのあとをついていった。

大体わかってるとは思うのだが、今の状況を少し説明しようと思う。

今はゆりかごと呼ばれる古代ベルカの遺産を破壊し、事後処理の最中だった。その時に、ユアンは次元世界へやってきた。

そしてユアンはフェイトに連れられて、どこかの部屋の前に着いた。

フェイトはドアをコンコンと叩く。

「ええで」

「失礼します」

「えと……失礼します」

部屋の中からした声に了承を得て、フェイトとユアンは中に入る。

「その子が報告にあった子やね」

「うん。ごめんね、こんな時に」

「ええよ。ほっとけへんのは、私も同じや」

「ありがと、はやて」

部屋にいたのは茶髪の女性――名はどうやら、はやてと言うらしい――は、フェイトと随分と仲良さげに話す。その際、ユアンが置いてけぼりをくらった。

「あ、ごめんねユアン。彼女はね、起動六課の部隊長の――」

「――八神はやてや、よろしゅうな」

「ユアンです」

八神はやてと名乗った女性は、ユアンに手を差し伸べて、握手を求める。ユアンはそれに応じて、握手をする。

「それで僕どうすれば？」

「えっとやなぁ、とりあえず、手続きはフェイトちゃんがしてくれるか？」

「うん。任せて」

「よし。ほんなら、機動六課の方に案内するわ。今ちょい半壊しとったけど、大分直ったし、アイナさんもおるしな。私たちもすぐ戻ることになるやろうし」

はやてはモニターを開いて、カチカチと何かをしながら、そう言う。フェイトも、はやての言うことに同意したようだ。

「ほな、行こかユアン君」

「はい」

そうして、ユアンは機動六課に向かうことになったのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ここは神々が犇めく神界と呼ばれる地。

「ふぅむ」

「むぅ」

どうやら今度は“太陽の神”と“月の神”は、いがみ合わず、何か考えているようだ。

「「……関西弁って中々エロいな」」

もうやだこんな神々……。

まあそんな馬鹿な二人の中――

「いつまでもふざけてないで、少しは真面目に話したらどうですか？」

“眼鏡の神”が、挑発気味にそう言うと――

「ああ？　いいじゃねぇか。時間なんざたっぷりあるんだからよ」

「発端はあなたでしょう？　もう少し責任を持っては？」

「……喧嘩売ってんのか？」

「そう思いたければ、ご自由に」

正に一触即発。“太陽の神”と“眼鏡の神”の威圧感が、辺りを支配し始める。

「やめんか！　儂等が争って何になる！　――っ！　ごほっ！」

「大丈夫ですか“風の神”？」

「ああ、すまんな“水の神”」

二人を止めようとした“風の神”は、むせたのかわからないが、急に咳き込む。その“風の神”を支えるのは“水の神”。美しい女性――見た目２０歳前後――流れるような青い長髪をしている。包み込んでくれるような、そんな柔らかな雰囲気がある。

「“風の神”の言う通りよ。やめなさい二人共」

「お母さん！」

それに続いて、発言してきたのは“コンプレックスの神”。“水の神”と同じく美しい女性だが、母性本能に溢れてる感じだ。見た目32歳前後だろう。髪は金髪のロングだ。さらに、その“コンプレックスの神”に抱きついたのは“ロリコンの神”。どうやら、“ロリコンの神”は“コンプレックスの神”を母と慕っているようだ。“コンプレックスの神”は、抱きついてきた“ロリコンの神”の頭をよしよしと撫でている。

「へっ、何だかしらけちまったぜ。ところで珍しいじゃねぇか。アンタがここにいるなんてよ」

「あらあら、そうかしら？」

“太陽の神”が挑発気味に言っても、“コンプレックスの神”はどこ吹く風と軽く受け流す。

そして“眼鏡の神”が、クイっと眼鏡を中指で持ち上げ、話し始める。

「さて、先程“探索の神”に今の状況を少し探ってもらいました」

それって、ユアンが行った意味がないんじゃ？

と、思わなくもないが、そこら辺はスルーした方が良いのだろう。

「どうやら、大規模な人間同士の争いが、あったようです。勝ったのは、管理局と呼ばれる組織ですね。先程ユアンを引き取った」

「まったく何故人間というのは、争いに拘るのにゃ。それも理由は私利私欲ばかりにゃ」

「そういうもんじゃろうて。人間同士の争いというのは、技術のぶつけ合いでもあるからの。それ故に技術が発展するのじゃよ」

「ほら、おじいさん。迷惑になるから出てこないの」

“猫の神”の発言に“トイレの神”が、和式便器から出てきて、発言するも、隣の“トイレットペーパーの神”に、再び和式便器の中に戻された。

ちなみにそれを神々が、グッジョブとか思ったのは秘密だ。だって臭いんだもん。

“トイレットペーパーの神”は、どこか優しそうなおばあちゃん――見た目８０歳――“トイレの神”とは、夫婦のような関係で、“トイレの神”の面倒を見ている。

「それで、ユアン君が引き取られた場所は、どんな所なんだい？」

“愛の神”は、あはぁ？　とでも言いそうな感じで、“眼鏡の神”に問いかける。“眼鏡の神”はそれに一瞬、ムカッと来たが、表情には出さず、話し始める。

あそこはどうやら、新設部隊で、まだ設立して、一年も経っていないらしい。だが、今回の事件は、この機動六課があってこそ、退けることが出来たようだ。実力はあると見て間違いない。
その読み通り、機動六課の戦力は異常だった。ランクについてはわからないが、高レベルの者達を集めて造ったのは、確かなようだ。
しかし、どうにも人選は、お人好しが多いようで、人柄は良い人が多そうだ。
とりあえずこんなところだろうか。

「そうか。ならばユアン君は、いじめられなくてすみそうだ」

「あらあら、そんなに心配なら、行かせなければよかったんじゃない？」

「可愛い子には旅をさせろと言うじゃない――か！」

いちいち服を脱ぐな。と、言いたいところだが、我慢我慢。
“コンプレックスの神”の言葉に、“愛の神”はいつもの調子で答える。

「お母さん……」

それに“コンプレックスの神”に抱きついていた“ロリコンの神”が、クイクイっと服を引っ張っる。それに“コンプレックスの神”は、顔を“ロリコンの神”に向ける。

「私より、ユアンの方が心配なの？」

“ロリコンの神”は顔を上に向けて、涙目になりながら、小首を傾げる。“コンプレックスの神”は、それに――「そんなことないわよ」――と言い、微笑みながら抱き締める。

「愛だ！　これこそ正に愛！　さあ、この僕にも愛のある抱擁を！！」

「お母さ～ん！」

「よしよし、“愛の神”、あんまり私の子を怖がらせないでね」

見事に微笑ましいシーンを、言葉の刃で切り刻んだ“愛の神”を、怖がる“ロリコンの神”。“コンプレックスの神”はその“ロリコンの神”の頭を撫でて、“愛の神”に困ったように笑って、注意する。

ちなみに“ロリコンの神”は“コンプレックスの神”の系列であって、別に“コンプレックスの神”の子供ではない。

第二話　僕は“愛の神”が苦手だ……（後書き）

終わりが微妙……。
どうも混沌の使者です。

ふむふむ、神々は収拾がつかなくて困ります。

あのままずっと書き続けるところでした（笑）

危ない危ない（笑）

それでは、また♪

第三話　僕がここにいる意味って一体……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ユアンは艦船アースラを出て、機動六課というところに、連れてかれていた。
と、その途中――車を取りに行く――凛々しい感じのお姉さんがいた。

「主」

「シグナム、すまへんな。疲れとるのに、こないなこと頼んでもうて」

「いえ、主の命でしたら」

「ありがとな」

シグナムと呼ばれた女性とはやては、ユアンそっちのけで、話を交わす。それにユアンは――「あの……」――と声をかけ、自分も会話に入れてもらう。

「ああ、ごめんなユアン君。彼女はシグナムゆうんや」

「どうも、ユアンといいます」

「ああ、よろしくな」

そうして、自己紹介を終えて、車に乗り込んだ。

席的には、運転席にシグナム、助手席にはやて、後ろの席にユアンである。

〈良かったねユアン君。好い人に巡り会えて〉

〈誤解を招く言い方しないでください〉

〈何が誤解か！　僕は君を心配して――〉

「そうや、ユアン君」

「はい？」

“愛の神”がごちゃごちゃ言ってきたが、ユアンは無視し、はやての言葉に耳を傾ける。

「フェイトちゃんから聞いたんやけど、変な力って？　あ、言いたくなければいいんよ。無理に聞こうとは思わんから」

はやては、フェイトの報告にあったそれが気になっていた。それ

は捜査官として、やってきた癖なのか。まあただの興味本意なのか、わからないがユアンに聞いた。しかし、無理矢理聞く気はないと言うように、手を振る。

「え〜と……」

〈ああ、別に構いませんよ。布石は打ってるんですから〉

〈了解です〉

そうユアンは“眼鏡の神”と神話で話して、スーっと息を吸い込み、ハーっと吐き出して、話す準備を整える。

「この力は『創造』の力です」

「『創造』の力？」

はやての疑問符に――「ええ」――と返したユアンは、徐(おもむろ)に手を前に出す。するとそこにけん玉が現れた。

「「！！」」

それを直接見たはやてと、ミラー越しに見たシグナムは驚く。何もない空間から、けん玉が現れたのだ。驚かないわけがない。

「このように無から有を造り出す力を、『創造』の力といいます」

流石に絶句しながら、けん玉を触らせてもらう、はやて。だが触ってみても、本物のけん玉と変わらない。

召喚魔法の一種なんかな。

とも、はやては考えるが、何か違う気もする。が、まあええかと思い、けん玉をユアンに返し、はやては口を開く。

「ありがとな。教えてくれて。あと、全然気持ち悪くなんかないよ。自信持ちぃ。それは才能や」

そう言って、朗らかに笑うはやてを見て、不覚にも顔を赤らめたユアンは、顔を伏せて――「あ……ありがとうございます……」――と、言った。

そんなことを話していると、目的地に着いたようだ。

「ここが……」

「機動六課や。少し壊れとるけど……」

そう言って、あははと苦笑いする、はやて。
ユアンは機動六課の部署を見て、ふとこんな疑問が浮かんだ。

僕って、結局何すればいいんだろう？

根本的な問題だった。
そう考えたユアンは急に心配になり、神話の回線を繋ぐ。

〈あ、あの結局僕は何をしたらいいんですか？〉

〈愛を――〉

〈“愛の神”は黙っててください！〉

〈何もするこたぁねぇよ。そこで遊んでりゃあいい〉

“愛の神”が出たので、ユアンはすぐさま怒鳴り黙らせる。次に発言したのは“太陽の神”で、別にすることはないと言われた。

「八神部隊長」

「アイナさん」

そこに柔らかな雰囲気の女性が現れた。名前はどうやら、アイナと言うらしい。

「じゃあアイナさん。あと頼んでエエか？」

「はい。任せてください」

例のごとくとりあえずユアンは、無視されて話は進められた。
ユアンは、んあ～と脱力してると、アイナさんに――「ユアン君？」――と、呼ばれて目を覚ます。

「あ……はい？」

「大丈夫？」

「は……い、大丈夫……です……」

目線を会わせて、母性溢れる顔で、アイナさんに言われて、ユアンは顔を赤らめて、顔を伏せて答える。
ユアンは、あんまり女性と接したことがない。実はまともに接したことがあるのは、“愛の神”だけだ。他の神とは、話に聞いたり、遠目から見たり、さらっと話したくらいだ。

その後、はやてとシグナムは、ユアンに――「アイナさんの言うこと聞くんやで」――と、言って、車を走らせて、どこかにいって

しまった。

「さ、こっちよユアン君」

「はい」

そうして、ユアンは機動六課に入っていった。
機動六課に入ると、あちこち修繕作業をしている人を見かけた。外面でも、多少壊れてたが、やっぱり内面も、まあまあ壊れているようだ。

「ここがあなたの部屋」

ユアンはなんとなく、機動六課を見渡しながら、進んでいると、自分の部屋へと辿り着いたようだ。アイナさんが、部屋のドアを開け、ユアンを招き入れる。

「宿舎の中だったら、自由に動いて良いからね。それじゃあ何かあったら、この通信端末で呼んでね」

「わかりました」

ユアンは通信端末を渡され、アイナさんに繋がる番号を教えてもらう。

そして、アイナさんはこの部屋を去っていった。

さて、何しようかな……。

と、考え、さっきこの宿舎の中は、自由に動き回って良いと言われたが、実際動く気にはならない。
ユアンはそのまま、ぼふんっとベッドにうつ向けに倒れる。

〈大丈夫かいユアン君！？　何かあったのかい！？　僕が愛――〉

〈――すいません。あなたの言葉を聞くと、ドッと疲れるんで、話さないでください〉

拒絶された“愛の神”は、絶句し、気絶したようだ。これが世に聞く“絶”の三連コンボである。（注：そんなものはありません。

ああ～、疲れた～。何もしたくない～。僕が生きてきた１２８年の間で、こんなに大変な日あったっけなぁ。ないなぁ。あ、でも初めて“愛の神”に会ったときも、疲れたっけ……。
でも“愛の神”の時は、完全な精神攻撃が多かったしなぁ。まあ成り行きで神になっちゃったけど……。
今回は、肉体的、精神的の両方で、平等に疲れたって感じだ。
あ……ダメだ……まぶたが……落ち……て……。

そうして、ユアンは眠りに落ちた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ここは神々が犇めく神界と呼ばれる地。

「ったく、何やってんだこいつは」

「バカなんだろ。いつもの事だ」

気絶している“愛の神”を見て、“太陽の神”と“月の神”が呆れる。

「クスッ、それだけユアンが大事なんじゃない？」

リンっという音が鳴り、その二人に話しかけたのは“探偵の神”。長い黒髪に鈴が付いた髪留めで、何束かに纏めている。顔立ちは女性のようだが、実は男性。見た目は２３歳前後だ。

「ほう、あなたが私達の中に顔を出すとは……また、珍しい」

「クスクス、僕的には君がこんなことをしている方が、珍しいと思うけどね」

「そうですか？　おかしいですねぇ。私はこういうイベントは好きなんですが」

「クスッ、まあそういうことにしとくよ」

何か“眼鏡の神”と“探偵の神”の間に火花のようなものが、見える気がするが、きっと気のせいだろう。

「ねぇねぇ、お姉ちゃん。遊ぼうよ」

「な、なんでワタシがアンタと遊ばなきゃいけないのよ！」

「遊んでくれないの？」

“ロリコンの神”が、“シスコンの神”に遊ぼうと持ちかけると、素っ気なく、あしらわれた。それに“ロリコンの神”は、涙目になって、“シスコンの神”を見つめる。それに“シスコンの神”は、ウッとなり――「わかったわよ」――と、言って、二人で遊び始めた。

“シスコンの神”は腰までの長さの金髪で、少しきつめの目をしている。見た目は１４歳前後。所謂（いわゆる）、ツンデレ使用だ。

どうやら、“コンプレックスの神”の系統は、家族のような呼び方をしているようだ。

「それにしてもあいつ、ウジウジしてんなぁ。何かイライラするぜ」

「あいつとは？」

“紙の神”が、胡座（あぐら）をかきながら、イライラするように、手を顎に当て、足をバタバタさせている。その“紙の神”に“風の神”が、問いかける。

「ああ？　ユアンに決まってんだろうが！　ユアンに！」

「そう言ってやるでないわ。見るからにまだ若いのじゃから。まだ神になって、１０８年しか経っておらぬと言うしのう」

「だとしてもだ！　あいつだって、神になってるってこたぁ、２５００年近くは生きてんだろうが！　早くても大体２０００年ぐらいだろ！　それなのに、あんなウジウジ、オドオドとよう……！」

「あっはっはっ！　あんまり、僕のユアン君を悪く言わないでくれたまえ！」

“風の神”が諭そうとするが、“紙の神”のムカつきは、中々収まらない。と、思いきや、突然復活した“愛の神”に度肝を抜かれる。

きっとユアンがいたら――「あなたのものじゃありません！」――と、言っていただろう。

「ユアン君は繊細なんだ！　か細いんだ！　極細なんだ！」

最後のはただ細いだけだろ。

まあ、そんな突っ込みは置いといて、そう自信を持って、話す“愛の神”に引き始めた“紙の神”と“風の神”は、その場を脱出した。だが、その後も、“愛の神”はユアンの自慢らしきものを延々と話していた。

「それで？　良かったのか？」

「何がですか？」

“月の神”が壁に背を預けながら、近くにいる“眼鏡の神”に、話しかける。

「とぼけんなよ。『創造』の力について、人間に話して良かったのかって聞いてんだ」

「そのことですか。構いませんよ。むしろこれでいいんです。もし人間がその力を利用するようであれば、文字通り消すだけですから」

“眼鏡の神”から、恐ろしいまでの殺気が溢れる。常人であれば、失神してしまうだろう殺気だ。

「はっ、貴様はほんと陰険だな」
「お誉めにお預かり光栄です」

しかし、“月の神”はそんな殺気をケロッとしながら、挑発するように悪口を話す。だが“眼鏡の神”は、そんなものには乗らず、スッと避ける。
何となく奇妙な雰囲気が、二人の中で交差し――

「はいはい、ストップストップ」

その雰囲気は一気に粉飾された。突然現れた“太陽の神”によって。

「な～に揉めてんだよ。楽しそうだから、俺も入れろや」
「「……」」

しかし、止めたかと思いきや、まさかの自分も入れて、やろう宣言。
珍しく止める側に回ったかと思えばこれだ。“月の神”と“眼鏡の神”は、馬鹿らしくなり、威圧を収めた。
それに“太陽の神”は――「何だ止めんのかよ」――と、愚痴をこぼすのだった。

第三話　僕がここにいる意味って一体……（後書き）

神の数が（笑）
どうも混沌の使者です。

いやぁ、このままいくと神の数は１００にも、上るんじゃないでしょうか（笑）

あっはっはっ、もう笑うしかないです。

まあ後悔はしてませんし、反省もしませんがね。

だって、あいつら面白いんですもん（笑）

一つ忠告するなら、あまり神々はあんまり、覚えようと思わない方がいいです。

自分の気に入ったキャラだけ覚えましょう（笑）

感想とかで気に入った神を言ってくれれば、そやつの登場回数が増える……かも（笑）

いやでもビックリなのは“愛の神”ですね。

まさかあの変態が、あんなに使いやすいとは……驚きの新事実。

書いてみればわかりますよ。

変態は使いやすい（笑）

私はこれを広めたいと思います（笑）

すんません、冗談です。

あ、でも使いやすいのは本当ですよ。

何たってこの小説で、一、二を争う登場人物ですから（笑）

それでは♪

第四話　僕は付き合いが少ない……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

月の光が消えていき、太陽の光が、現れ始める。どこか澄んだ空気で、何となく気持ち良いと思うこの瞬間。ユアンは外で――

皆さんご一緒にラジオ体操を始めましょう♪　腕を前から上にあげて、大きく背伸びの運動♪

ラジオ体操をしていた。アイナさん達、寮母の方々と。

何で僕こんなことしてるんだっけ？

ラジオ体操のラジオの声を聞きながら、そう考え、起きたときのことを思い出す。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

それはまだ太陽の光より、微妙に夜の闇が勝っている時である。

「う……ん……？」

ユアンが目を覚ます。

「ここは……？」

と、言葉に出し、昨日の事を思い出す。

そうだ。僕は目としての役目を果たすために、来たんだっけ……。
でも特にすることはないんだよね。

そう思い、ユアンは体を起こす。
まだ早い時間だ。もう一回寝てもいいのだが、どうにも眠る気にはならない。なので、部屋を出て、宿舎を放浪することにした。

〈ユアン〉

〈……“眼鏡の神”ですか？〉

〈はい、そうです。昨日は遊んでて良いと言いましたが、なるべく人と関わるように遊びなさい〉

〈何故ですか？〉

〈余計な詮索はしなくていいですよ。あなたはそのまま――〈僕のユアン君に何て口を〉――黙りなさい。とにかく、頑張ってください〉

〈はあ……〉

何か“眼鏡の神”の話の途中に“愛の神”が、何か喋ってた気がするが……まあ、気のせいだろうとユアンは思い、生返事をする。

「あれ？　アイナさん？」

「ん？　ユアン君」

ユアンが歩いていると前に、アイナさんが歩いており、ユアンは話しかける。アイナさんもそれに気づき、二人して歩く。

「随分と早いですね。どうしたんですか？」

「私は皆さんの部屋の準備をするためよ。君は？」

「目が覚めちゃって、どうしよ――」

と、発言したところで、“眼鏡の神”の言葉を思い出す。

人と関わるように。

と。

それを思い出したユアンは徐に――「手伝いましょうか？」――と、口にしていた。

それにアイナさんは――「ありがとう。それじゃあお願い。でもその前に――」――そう微笑んで言った。ちなみにそれにユアンは、頬を赤らめたのは秘密だ。

△△△△△△△△△△△△△△△

そんな訳で、朝のラジオ体操は、必須だとかで、ラジオ体操をしていた。

そして、ラジオ体操が終わり、皆それぞれの仕事へと捌けていく。

「それじゃあユアン君は、私のお手伝いをお願いね」

「はい」

そうして、アイナさんとユアンは、宿舎に戻り、各部屋の準備を

始めた。

準備をしている最中――何かやけにデカイベッドがある部屋――に、こんな会話をしていた。

「アイナさん、これが終わったら遊びませんか？」

「え？　うん、仕事が終わったらいいわよ」

「ほんとですか！」

「う、うん。何して遊ぶ？　鬼ごっこ？」

「二人でやる遊びじゃないんじゃ……」

「あ……ごめんなさい。つい……」

アイナさんは、ヴィヴィオの世話をしてたせいか、つい鬼ごっこという発想が生まれてしまった。だが、ユアンはそれに、ふと、こんなことを言い出す。

「鬼ごっこと言えば、こんな話を知っていますか？　鬼ごっこの起源は、鬼隠しから来ているって」

「いえ」

そうして、ユアンは語っていく。鬼ごっこの話を。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

遥か昔。

人の心には、鬼が住まうとされていた。

その鬼は人との触れ合いにより、移動する化け物だった。

鬼は人の心の中に、住まっているため、人間は気づかない。

だから、人同士の何気ない触れ合いが、鬼を移動させていく。

さらに、その鬼はその触れ合いにより、成長していく。

そして、鬼が成長しきった時にいた宿主は――

△△△△△△△△△△△△

「ど、どうなるの？」

「半狂乱に陥って、人を襲う鬼となるんです。それが後に“鬼隠し”と呼ばれて、さらに“鬼ごっこ”と、変化したわけです」

「物知りなのねユアン君は」

そんな知識をひけらかすユアンを、素直に感心するアイナさん。ちなみにこの話は、作者が考えた話なので、真実とは一切関係ありません。

「そうだ。ユアン君、良かったら、お買い物に付き合ってくれないかな？　その後、時間があったら遊ぼうね」

「わかりました」

そうして、ユアン達は他の部屋の準備などもして、宿舎を出て、市街地へと向かっていった。

そして、どんどん物を買い込んでいく。

「ごめんねユアン君。荷物持ち頼んじゃって」

「いえいえ」

大量の荷物を持つユアン。まあ、ユアンは仮にも神だ。力は常人以上ある。

しかし、大量の荷物だ。ただこれも仕方ない。何と言ってもまだ機動六課は、本格的に活動をしていない。スタッフも何人かは、病院などに居り、全員揃っていない。そのため、分担して、買い物などもしないといけないため、こんなことになっている。

「それにしても、結構ユアン君って、逞しいのね。そんな大荷物持って、ケロッとしてるなんて」

「そ、そんなことないです！　普通ですよ。普通」

「そうかしら」

そう言って、柔らかく、少し悪戯めいたアイナさんの微笑に、ユアンはカァーと顔が熱くなり、赤くなっていく。ユアンは大分女性に対して、免疫が低いようだ。

最近こんなんばっかだ……。何で僕こんなに……。はぁ、確かに“愛の神”以外とは、あんまり関わり合いなかったからなぁ。うぅ……どうすれば……。

「止まれ！　止まらないか！」

「チッ、退け退け！」

すると、後ろの方で、そんな声が聞こえた。

「来い！」

「キャッ！？」

いきなり、現れたマスクの集団は、アイナさんを捕まえて、機械じみた杖を構えて、牽制してくる。

「寄るんじゃねぇぞ！　変な動きしてみろ！　この女がどうなっても知らねぇぞ！」

「やめろ！　お前らは逃げられない！　諦めろ！」

「るせぇ！　いいから寄るんじゃねぇ！」

変なマスクの集団と、それを追う統一した服装の者達が、対峙している。周りにいた住民達は、その場を急いで逃げる。ユアンは何が起こったのか、よくわからず、困惑して、立ち竦む。

だが、一つだけはっきりしていることがある。

それは――

「アイナさんに手を出すなぁ！！」

アイナさんを傷付けようとしていることだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ここは神々が犇めく神界と呼ばれる地。

「寮母ってよぅ」

「あ？」

「なんつうか……憧れだよな」

「そうか……？」

何だか“太陽の神”と“月の神”が、グデ～としながら、話す。どうにもやる気がないようだ。

「ユアン君は無邪気で！　可愛くて！　いじめたくなるんだ！」

最後のはお前の欲望だろ。てか、まだユアンの自慢が続いてたのか。

そんな“愛の神”の周りには誰もいない……かと思いきや、誰かが近づいている。

「あらあらダメよ。いじめちゃ」

“コンプレックスの神”だ。

「“コンプレックスの神”じゃないか！？　そうか！　君も僕のユアン君の話を聞きたくて来たんだね！　わかった！　話そうじゃないか！」

“も”って、誰も聞いちゃいねぇよ。というつっこみをしたいが、止めておこう。

「うふふ、“愛の神”はユアン君の事、どうしたいの？」

“コンプレックスの神”は困ったような、しかし余裕な感じで笑い、言葉を発する。

「愛したい！！」

「あらあら、でも大変ね。あの子の事ばれてもいいのかしら？」

すでに“愛の神”の発言は無視である。“コンプレックスの神”の発言に“愛の神”の顔が、一瞬ピクッと緊張した気がするが、次の瞬間には――

「あっはっはっ！　ユアン君の素晴らしさなら、この僕がいくらでも、ばらそうじゃない――か！」

服を脱ぎ散らかし、いつもの調子で、叫ぶ。

「そう。まあ何か考えがあるみたいだから、この辺にしとくわ」

その“愛の神”の微妙な変化を見た“コンプレックスの神”は、その場を去っていった。

「ふっ、ユアン君の事を知る者もいるみたいだ。でも、それもユアン君のため……頑張ってくれたまえよユアン君」

独りになった“愛の神”は、そう呟くのだった。

「ねぇねぇ、お姉ちゃんお姉ちゃん」

「何よ」

“ロリコンの神”と“シスコンの神”が、一緒に遊んでいたのだが、“コンプレックスの神”が“愛の神”と話しているのを見て、“ロリコンの神”は“シスコンの神”に話しかける。

「お母さんは“愛の神”が好きなのかな？」

「はあ？　そんなわけないでしょうが。お母さんが、あんな気持ち悪い奴のこと好きなんて、あり得ないっつうの」

「そうなのかな……お母さんは“愛の神”より、私の方が好きかな……？」

「ああもう！　そんな泣きそうな顔して言わないでよ！　大丈夫、お母さんはアンタの方が、好きに決まってるわよ！」

「ほんと……？」

「本当に本当！　だから、そんな顔しないで！」

“シスコンの神”にそう言われた“ロリコンの神”は、えへへと笑う。

ちなみに私はこれを想像した瞬間、悶え死ぬかと思いました。おかしいな、私は普通だと……こんな妙なキャラばかり作っといて、言える立場じゃないか（笑）

まあ、私事は置いといて、落ち着いた“ロリコンの神”は――「じゃあ続き♪」――と、言って、“シスコンの神”と遊び始める。

「まったく、こんなんでいいにゃか……もっと真剣に考えたらどうにゃ」

“猫の神”は、そんなほのぼの空気を、イライラし、ため息を吐く。

そこに――

「堅いワンねぇ。もうちょっと柔らかくなれないワン？」

“犬の神”が現れた。

“犬の神”は、茶色い毛皮で、２mクラスの犬。きちんと両足で立っている。

“猫の神”は明らかに、嫌そうな顔を浮かべる。

「何の用にゃ？」

「何の用とはご挨拶ワン。会いに来ちゃいけないワン？」

「小生は会いたくないにゃ。お前のような軽薄な奴は嫌いにゃ」

“犬の神”は“猫の神”に、ベタベタとする。それを“猫の神”は嫌い、素っ気なくする。

「よく言うワン。僕ちんが構わないと、だ～れも構ってくれない、孤独な猫のくせしてワン」

「黙れにゃ。誰も構ってくれにゃんて言ってないにゃ」

“猫の神”は、段々とイライラが増していき、ピリピリとした空気が、生まれる。

「そう怒るなワン。仕方ないから、ここは引くワン。また来るからワン♪」

「二度と来るにゃ」

“犬の神”は、フラフラっと去っていく。その背中に“猫の神”は、本気の感情を込めて、そう言った。

第四話　僕は付き合いが少ない……（後書き）

すべて私がツッコミをしたい気分だ。
どうも混沌の使者です。

ああ……このバカどもにツッコミをしたい。
まったく誰がこんなバカに神を仕上げたんだか。

「……」

ん？

「……（ワタワタ）」

んあ？

つ【お前だお前】

紙に書くんじゃなくて、自分で言え！

「ビクッ……（フルフル）」

あ……ごめん。驚かして。

つ【わかればいいんだよ】

だとこらぁ！

「ビクビクッ……（ピュー）」

逃げられた……。

何なんだあいつは？

第五話　これが僕の世界だ……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ユアンが叫んだ瞬間、光が世界を包み込んだ。

「ん……？　ユアン君？　ユアン君！？」

アイナさんは光が晴れると、自分が自由になってるのに気づき、辺りを見渡し、ユアンがいないことに気づき、慌て出した。

統一した服装の者達――管理局員――は、マスク集団がいないのに気づき、辺りの捜索に当たり始める。

「どこ行ったのユアン君？」

アイナさんは不安にかられ、胸を押さえた。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

「な……何だ……？」

「何が起こって……？」

謎のマスク集団――計１０名――は光が晴れると、何もない原っぱの中央にいた。

「ここは僕の世界だよ」

「誰だ！」

マスク集団は、全員声がした方に向き直り、その一人が、声の主に叫ぶ。

「僕はユアンだよ。おじさん達」

「お、おじさんだと！？　俺らはまだ２０代だ！」

「まあそんなことはどうでもいいよ。それより遊ぼうよ」

「は？　何言ってんだガキが！　死にな！」

ユアンがそう言うと、マスク集団の一人が、溜まっていたムカつきからか、青い球を撃ってきた。どうやら、これが神々が話していた異能の力――魔法――なのだろう。魔力弾と言われる、それはユ

アンに一直線に向かっていく。
しかしそれはユアンに当たることはなかった。ユアンに当たる直前で、霧散し消えた。
「なっ！？　何だと！？」
「無駄だよおじさん達。僕に攻撃は出来ない」
「う、撃てーー！！」
それを気持ち悪く感じたマスク集団達は、全員で機械じみた杖で、魔力弾を何発も、ユアンに放つ。
煙が辺りに立ち籠める。
しかしそれでも――
「ば……化け物……！」
ユアンは無傷だった。何もしていないのに、それをマスク集団達は、化け物と感じ、後ずさる。
「それじゃあルールを説明するよ。ルールは簡単だ。鬼ごっこと同じ。最初は僕が鬼で、鬼がタッチしたら、タッチされた人が鬼だよ。タッチされた人は１０秒間動けないからね。そして１０分間経って、鬼だった人は罰ゲームだからね」

ユアンは無邪気にそう説明する。そう……無邪気に。どこまでも純粋で無邪気に。どこか恐い感じだ。

「それじゃあ……スタート！」

ユアンがトンっと地面を叩くと、ユアンの姿が霞み、その姿が一瞬にして、マスク集団の前に現れる。

それにマスク集団達は、殺られると思ったが――

「タッチ♪」

ただ触られただけだった。

「逃げろー♪」

再びユアンの姿が霞んだかと思ったら、また元の位置に戻っていた。

「う……動けねぇ……」

触られた一人は動けず、それに他のマスク集団もどういいことだと慌てる。
しかし――

「おっと……」

１０秒経つと、拘束が解けた。
どうなってんだと話し合うが、結論は出ず、とにかくあのガキをぶっ殺さねぇとと思い、相談を開始する。幸いユアンとかいったガキは、動く気配はない。

２分ほど話し合い、やはり手段は浮かばない。とりあえず、先程より威力の高い、魔力による砲撃を放とうという話になり、一斉放火するが――やはり無意味。ユアンの体に触れる前に、砲撃は霧散した。

その後も無駄に攻撃を繰り返すが、何の意味もない。

そうして、マスク集団は何も出来ないまま、遊びを開始して、１０分が経とうとしていた。

「3、2、1、終了。罰ゲームだね」

そうして、１０分の時が経った。

「な……！　何だこいつはー！？」

「ど、どうした！？」

「おい！」

マスク集団の一人――ユアンに触られた――は、突然狂ったように叫びだした。それに他の奴等は慌てるばかり。

「く、来るな！　来るんじゃねぇ！　ア……ア……ギャアァァアァァ！！？」

マスク集団の一人は、半狂乱に陥ると、泡を吹いて、気絶した。

「まずは一人だね。じゃあリセットして、また僕からだ」

ユアンはそう言うと、再び先程と同じ、行動をし、タッチする。マスク集団は、先程の者を見ている。そしてそれは確実に、ユアンの遊びに関係しているのは、間違いないだろう。だからこそ、全員顔を青ざめる。マスクしてて、わからないが。

とりあえず、この馬鹿げたルールに従わなくては、いけないんだと思い始める。そうしなければあの……あいつのように……。

「う……うわぁあ！？」

と、マスク集団は、ユアンに向かって、走り出す。
しかし――無駄なことだ。ユアンは普段あれだけ、ウジウジしてたりしてるが、仮にも神。力、速さ、そのどれを取っても、人間の常人以上だ。こんな奴等に追い付けるはずがない。

「な……何だ……鬼……鬼が……ギャァァァァァ！！」

無情にも１０分の時が経過し、もう一人気絶した。

「二人目、それじゃあ続きだね」

「な、何なんだよお前は！？　何が起こってんだ！？」

「後悔するといいよ。僕を怒らせるとどうなるか」

凄まじき殺気が、マスク集団の肌を撫でる。殺気に当てられたマスク集団は、まともに動けない。足が竦み、歯がカチカチとなり、うまく噛み合わない。

「これが僕の『世界創造（ワールド・クリエイト）、“鬼ごっこ（オウガ・プレイ）”』だ」

「う……う……うわあぁぁあぁああ！！？」

そうして、断末魔の叫びが、何度も響き渡った。

△△△△△△△△△△△△△△△

約１時間４０分後。
市街地に光が生まれ、気絶しているマスク集団とユアンが、突如現れた。

最終的には、仲間割れか。まあこんなものだよね。

ユアンはそう考え、さて、どうしようと考えようとした瞬間――

「ユアン君！」

抱きつかれた。
ユアンは一瞬、何も考えられず、頭が真っ白になる。
だが頭が覚醒していくと、段々と意識がはっきりしてくる。

「あ、あああアイナさん！？」

抱きついてきたのは、アイナさんだった。ユアンが抱きつかれたのは、これが初めて――厳密に言えば、フェイトを入れて、二回目だが――そのため、慌てふためき、何をどうすればいいのか、わからない。

えとえと、どうすれば！？　アイナさん、泣いてるし、抱き締め返した方が――って、それは何か違うよね。どうすれば！？

もうどうしていいかわからず、手をワタワタさせながら、そう考えるユアン。

「心配かけさせないで、ユアン君。どこに行ったのかって、ずっと心配だったんだから……」

アイナさんは、面倒見がいい。それは自分自身子供が好きなのもあるし、何より子供を守りたいという気持ちが強い。それは、先の大戦で、何の力も持たずに、ヴィヴィオを最後まで、守ろうとしたことからも窺える。結局何も出来なかったわけだが、それでも――いや、だからこそ、今度こそ守りたいのだろう。それが誰であろうと。

ユアンはその言葉に、心配……か、と考え、思えば、ユアンは心配という心配をされた覚えがない。何となくこそばゆい感じがして、頬を掻く。

「その……ごめんなさい……でも……そろそろ……離れた方が……」

「え？」

ユアンはそう言って、周りを見渡す。それに倣い、アイナさんも顔を上げ、周りを見渡す。すると、周りには大分注目を浴びていた。

それも当然だろう。突然光から少年とマスク集団が現れ、光から現れた少年と女性が抱き合っている。まあ注目されるだろう。

アイナさんは顔をカーっと赤くし――「い、行こうユアン君」――と、顔を伏せて、歩いていった。ユアンはそれに置いてあった荷物を持って、アイナさんについて行った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ここは神々が犇めく神界と呼ばれる地。

「よくやったぜユアン！」

「るっせぇな、耳元で喚(わめ)くんじゃねぇよ。ガサツ女が」

初めて、ユアンのウジウジしていない姿を見て、興奮気味の“紙の神”。その“紙の神”に“太陽の神”が、突っかかる。

「ああ？　そっちの方が口がわりぃ癖につべこべ言ってんじゃねぇぞ！」

「ああ？　そっちの方が断然わりぃだろうが！」

「んだとおらぁ！！」

「やんのかごらぁ！！」

白熱し、ガンを飛ばし合う二人。そんな二人を見ている神々が、思うことは一つ。

どっちもどっちだろ。

である。

「ばあさんや」

「何だいおじいさん？」

今度はこちらで、“トイレの神”と“トイレットペーパーの神”が、話している。

「水を……くれんか？」

「イヤです」

「そうか……」

その会話で、“トイレの神”は、和式便器の中に戻っていった。

これを見た神々が思うことは一つ。

何しに出てきた。

である。

「あ♪　おにいちゃんだぁ♪」

「うあっ！？　ちょっ、抱きつくなバカ！」

「うぅ～、私、バカじゃないもん！」

「わかった！　わかったから、抱きつくなって！」

“シスコンの神”と遊んでいた“ロリコンの神”は、“ブラコンの神”を見つけて、抱きつく。それに“ブラコンの神”は、慌てて

引き剥がそうとするが、“ロリコンの神”は離れず抱き締め続ける。
“ブラコンの神”は、黒い短髪で、見た目１８歳くらいの男。

「ひくっ……おにいちゃん……私のこと嫌いなの？」

「うっ……」

「ちょっと！　何泣かせてんのよ！　このバカ兄貴！」

「何だとこ――ああ、くそ！　ゴメン！　嫌いじゃないから。抱きついてていいから。兄ちゃんはお前のこと大好きだぞ」

「ほんと？　やったぁ♪」

「うわ……変態……」

「じゃあどうすりゃよかったんだよ！」

「うっさいこのバカ兄貴！　フンッ！」

なんていう兄姉妹によるやり取りを見て、神々が思うことは一つ。

微笑ましいなこのヤロウ。

である。

「はあ……そんな四コママンガみたいな展開は、どうでもいいんですが、あれがユアンの『世界創造（ワールド・クリエイト）』ですか」

「そうじゃな。じゃが……どうにも微妙な『世界創造（ワールド・クリエイト）』じゃ」

「そうですね。あれでは立場が対等で、優位には立てません」

“眼鏡の神”がため息混じりにそう言うと、“風の神”が反応し、“水の神”も会話に入る。

「まったくですねぇ。むしろ自分から、劣位に立っています」

「素晴らしいよユアン君！　自ら劣位に立ちながら、勝利する！　慈愛を込めた『世界創造（ワールド・クリエイト）』！　流石だよ！」

「あなたはどうして、雰囲気をぶち壊すんですかねぇ。愛なんて下らないことばかり言って」

突然現れる“愛の神”をいい加減ウザったく感じたのか、“眼鏡の神”が挑発気味に言い放つ。

「愛は大事だよ“眼鏡の神”。愛こそ世界のすべて――さ！」

「本当にイラつきますねぇ。この場で潰して上げましょうか？」

「あっはっはっ！　それなら僕は君に愛を教えようじゃない――か！」

“眼鏡の神”の殺気が膨れ上がるも、“愛の神”は服を脱ぎ散らかして、いつもの調子で話すだけ。それが“眼鏡の神”をさらにイラつかせる。

「クスッ、止めた方がいいんじゃない？　最上位ランク保持者の二人がぶつかったら、どうなるかわからないよ？」

リンッという音がして、その二人を止めたのは“探偵の神”。

「この私がそんな無駄な戦いをするわけないでしょう。少し言葉が過ぎただけです」

「クスクス、そうかい。まあ“愛の神”に喧嘩なんか売ったら、どうなるかわからないしね」

“探偵の神”に悟られた“眼鏡の神”は、殺気を引っ込め、フーッと息を吐く。

「“探偵の神”じゃないか！　そうか！　君も僕のあ――」

「――クスッ、それじゃあね。僕は撤退するよ。『世界創造（ワールド・クリエイト）、“愛（ラヴ・コンダクション）

乃伝導”』なんか受けたら堪んないしね」

“愛の神”の言葉の途中に、“探偵の神”は出ていってしまった。
“愛の神”はそれに――「つれないねぇ、まったく」――と、呟くのだった。

第五話　これが僕の世界だ……（後書き）

ユアンが怖い人になった。
どうも混沌の使者です。

遊びは無邪気にやるものと思い、遊ぶときのユアンは無邪気にしてるんですが……ふむ、予想以上に怖いな。

「……」

また君か……。

〇【おい、親父】

誰が親父だ！

「ビクッ……（フルフル）」

お前……そのゴスロリファッションに可愛い顔して、か弱そうだからって、口の悪さをごまかせると思うなよ。

〇【無駄に丁寧な説明ありがとよ】

潰す！（ダーッ！）

「ビクッ……（ピュー！）」

ちくしょう……また逃げられた……。

次会ったら潰す……！

第六話　僕は遊びが好きだ……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

あの後、気絶していたマスク集団は管理局に捕まり、運ばれていった。ちなみに運ばれる際、うわ言で――「鬼……鬼が……」――と、顔を歪ませて言っていた。

「それにしてもどこにいたのユアン君？　急にいなくなったと思ったら、また急に現れて」

「ごめんなさい……その……僕の力なんです」

「ユアン君の？」

アイナさんはユアンの言葉に疑問符を浮かべる。それにユアンは――「はい」――と、答え、話し出す。

「『創造』というんですけど、『創造』の力には、無から有を造り出す通常の『創造』と、自身の世界を創り出す『世界創造』の二つがあるんです。今回使ったのは『世界創造』です」

「え～と……それは稀少技能（レアスキル）の一種なの？」

アイナさんはユアンの言うことが、よくわからず一応自分が知っている知識で聞いてみる。
しかしユアンは、稀少技能って何だろうと思い、首を傾げる。
そこに“眼鏡の神”が神話を繋いできた。

〈稀少技能とは、その世界での……まあ簡単に言えば、失われた魔法技術ですかね。時々、先祖帰りなのか、それとも受け継いでいったものなのか、わかりませんが、持っているものがいるようですよ〉

〈そうなんですか〉

〈とりあえず、そんなようなものかもしれないぐらい言っときなさい〉

〈了解です〉

「まあそんなものかもしれません」

ユアンは“眼鏡の神”とそう会話を交わし、アイナさんに返事をした。　ちなみに『世界創造（ワールド・クリエイト）、鬼ごっこ（オウガ・プレイ）』は、ユアンが話したルールに従わなくてはいけない。敵意やその他の攻撃意識は、すべて霧散し弾かれる。それは敵、味方両方に適応する。つまりはユアンも攻撃は出来ない。ユアンに負けると、再起不能になる。勝つと、この世界を抜けられる。

「そう。でもあんまり危険なことしちゃダメよ。あのマスクの人達

はユアン君がやったんでしょ？」

「ごめんなさい……アイナさんが捕まったと思ったら、傷つけられるかと思ったら、体が勝手に反応しちゃって……」

「――っ！　……そう言ってくれると嬉しいけど、でもダメよ。危ないことしたら」

アイナさんはユアンの純粋な言葉を聞いて、嬉しくなり赤くなる顔を伏せつつ、言葉を発する。

「ごめんなさい……」

アイナさんは、謝るユアンの額にデコピンを打つ。それにユアンは――「あたっ」――と、小さく悲鳴を上げる。

「男の子がそう簡単に謝らないの。メッだぞ」

額を押さえるユアンに、アイナさんは人差し指を立てて、ウインクしつつ笑って、そう言う。

ユアンは、全身から発火するんじゃないかというほど赤く、熱くなり、顔を伏せながら――「……はい……」――と、か細く呟いた。

そうして、二人は機動六課宿舎へと戻っていった。

「ずいぶんと日が落ちちゃったね。今日はもう遊ぶの無理かな」

「そうですね」

宿舎に戻ると、日が大分落ちており、遊ぶのはもう無理と判断したアイナさんは、ユアンにそう言う。ユアンもそれに少し残念に思いながら、了承する。

そして、部屋に戻ったユアンはベッドに突っ伏した。

は～……今日も疲れたな～。ラジオ体操して、部屋の準備して、買い物行って、『世界創造（ワールド・クリエイト）』を使って……。

と、ユアンは考えて、アイナさんの笑顔を思いだし、赤面する。

うぅ……なに思い出してるだ僕は……。

顔をベッドに埋めて、恥ずかしがるユアン。

何度も言うようだが、ユアンは付き合いが、少ない。まともに付き合いがあったのは、“愛の神”だけだ。あの“愛の神”だけなのだ。もう一度言おう“愛の神”だけなのだ。大事なことなので、3回言いました。

そして、ユアンは眠りについた。

次の日の昼頃。

「今日は何を？」

「こっちに来る子がいてね。今はその子の出迎えに」

ユアンがアイナさんの手伝いをしに来て、何をすればいいのかと聞くと、アイナさんはそう言って、宿舎の玄関口まで行く。

「アイナさん！」

「ヴィヴィオ！」

玄関口まで辿り着くと、ヴィヴィオと呼ばれた金髪の少女とアイナさんが抱き合う。それを微笑を浮かべて、見つめるヴィヴィオを連れてきたと思われるサイドポニーの女性。

「君がユアン君？」

その女性はユアンを見つけると、目を合わせて聞いてきた。

「えと……はい……あなたは……？」

「あ、ごめんね。私、なのは、高町なのはだよ」

ユアンは直視するのが、恥ずかしくなり、目を背けながら、返事をすると、女性――高町なのはは微笑んでそう言った。

なのははユアンにそう言った後、再びアイナさんに向き直る。

「それじゃあアイナさん、ヴィヴィオの事よろしくお願いします」

「はい」

「ヴィヴィオ、アイナさんの言うこと聞くんだよ」

「うん！　なのはママも早く帰ってきてね」

「うん」

なのはは、急いでいるのか、ヴィヴィオの頭を撫でて、そそくさとどこかに行ってしまった。

「あの人は……？」

「高町なのは一等空尉、この機動六課スターズ分隊の隊長よ」
「隊長ですか……へぇ～……」
とりあえずユアンは、隊長という言葉に反応し、少し驚く。
何だかあんまり強そうには、見えないけど……強いのかな？
そう考える。実際、なのはは初見だと、正直言って、そんなに強そうには見えない。だがそれが間違いだと気づくのは、まだまだ先だろう。
と、ユアンがそんなことを考えてると、何か斜め右下２３度方面から、視線を感じ、そちらを向くと――
「……（ジーッ）」
ヴィヴィオと呼ばれた少女が、その緑と赤のオッドアイで、見つめているのに気づく。
「えっと……」
「おにいちゃん誰？」

「僕はユアン……だけど」

「……（ジーッ）」

ユアンが自己紹介すると、ヴィヴィオは品定めでもするかのように、再びユアンを見つめる。

ユアンはどうすればいいかわからず、アイナさんに目配せするが、アイナさんはニコニコしているだけである。

「な……何かな？」

「……遊ぼ！」

「遊ぼう！」

返事早！

と、思ったのもつかの間、ヴィヴィオとユアンは、ニコニコしながら一緒に遊び始めた。

ユアンは遊びに対して、異様な情熱のようなものがある。それは遊ぼうと言われたら、返事するのにコンマ1秒も満たない。

「ユアン君……」

アイナさんは二人が仲良くなれば良いなと思い、黙っていたのだ

が、まさかここまで早く仲良くなるとは思わず、苦笑するのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ここは神々が犇めく神界と呼ば（ｒｙ

「省略すんなよ」

ごめんなさい。

「まあそんなこたぁどうでもいい。それよりょうもっとうめぇ飯でねぇの？」

「そうですねぇ。もう少しレベルを上げて、欲しいものです」

“太陽の神”と“眼鏡の神”が、目の前にあるご飯に不平不満を言い連ねる。

「まったくにゃ。もっと高価にゃキャットフードはないにゃ？」

「そう言うでない。あれも頑張って、作っておるのじゃから」

それに続くように“猫の神”が言い、それらをカバーするように“風の神”が発言する。

「“風の神”の言う通りさ！　これは愛情が詰まっている素晴らしい味だよ！」

「愛情があったところで、うまくなるわけねぇだろ」

“愛の神”が“風の神”に賛同したかと思えば、“紙の神”がだるそうに否定する。

「お姉ちゃん、おにいちゃん、このご飯美味しくならないの？」

「うん？　ならないんじゃないの？　ヘタレだし」

「ああ……まあ、後で料理人に頼んでみような」

“ロリコンの神”の純粋な言葉に、“シスコンの神”が諦めの境地を開き、“ブラコンの神”がもう一つの選択肢を出す。
そんな中、プルプルと怒りに震えている少年を発見。

「……だったら来なければいいだろッス！　てか、何でイベント事は、いつもうちなんスか！　何で集まるんスか！　何で、さも当然

みたいにいるんスか！　オレっちの家は集合住宅じゃないッス！」

最後の表現はおかしいだろ。

と、全員が思ったが、口には出さなかった。

今言葉を捲し立てていった少年は、“友愛の神”。見た目１５歳前後の少年で、白い髪をしている。何とこの神はある言葉を言うと、何でも言うことを聞いてしまう。

それは――

「そう言うなよ“友愛の神”、“友達だろ？”」

“太陽の神”が言った、“友達だろ？”

である。

これを言われると“友愛の神”は、頼みを断れない。それが例え初めて会った奴だとしてもだ。

そんな友達にしたら、扱いやすいことナンバーワンの男が、“友愛の神”である。

“友愛の神”はそう言われると、反論出来ず、頭を垂れるだけだった。

実はここは、大体一教室程度の広さで、今は敷き詰められた畳の上に、ちゃぶ台が、その四隅辺りに置いてある。

そんな感じで皆で取り囲んで、食べているわけだ。

「おいこらぁ……！　もっと詰めろや。　せめぇだろ……！」

「黙れ。貴様が詰めればいいだろ……！」

「バカは静かに食べれないんですかねぇ？　だったら、消えて欲しいものです」

「ああ……この味……愛情に満ちている……なんて美味いんだ……！」

四隅のちゃぶ台の一つで、食べている四人は、“太陽の神”、“月の神”、“眼鏡の神”、“愛の神”だ。

何故この四人で食べさせた。完全に場が、殺伐としている。殺気が飛び交い、飯の味なんてわからねぇだろという感じだ。まあ、一人だけ完全に、違うベクトルだが。誰かはわかりますよね。

「ふむ、これはこれでうまいと思うがのぅ」

「そうですね。これはこれで」

「がっはっはっ！　これぞ男の料理！」

「暑苦しい。喋らないで」

次のちゃぶ台で食べているのは、“風の神”、“水の神”、“火の神”、“氷の神”。

どうやら、“氷の神”は“火の神”を嫌っているようだ。

“火の神”は燃えるような赤い髪で、左目に傷があり、見た目29歳前後の男性。狂暴そうで、ガサツそうな顔をしている。

“氷の神”は蒼い蒼い髪をしていて、見た目29歳前後の女性。氷のように冷たい目をしている。非常にクールである。

「何でいるにゃ？」

「また来るって言ったワン」

「さっき出ていったばかりにゃ」

「また来たのに変わりはないワン」

“猫の神”の苛立たしげな声に、“犬の神”は飄々と答える。どうやら、こちらでも見えない火花が散っているようだ。

「ま、これはこれで、飲めるからいいけどな」

「また“紙の神”は“ソーマ”を飲んでるッスね」

「ああ？　いいだろうが。お前も飲め！　“友愛の神”！」

「嫌ッスよ」

「と・も・だ・ち・だ・ろ？」

「……わかったッス……」

“猫の神”達と一緒に食べているのは、“紙の神”と“友愛の神”。ちなみに“ソーマ”とは、地球でいうところの酒である。神のみが飲むとされる。それを嫌々飲まされる“友愛の神”。お気の毒としか言えない。

「ああ！　“ショタコンの神”がいる！」

「“ロリコンの神”ばっか、お兄ちゃんとおねえちゃんを独占してずるいから、僕も来ちゃった」

「むぅ、来なくてよかったのにぃ」

「なんだよ！　いっつも独占してるんだから、いいじゃないか！」

「お姉ちゃんもおにいちゃんも私のなの！　私に構ってくれなきゃヤなの！」

「僕だって構ってほしいもん！」

妹弟喧嘩し始めた二人を止めるために、“ブラコンの神”が止めに入る。

「ちょっと二人ともやめろよ。ちゃんと二人とも構ってやるから。なっ！」

「なっ！　何でワタシがそんなことしないといけないのよ！　兄貴だけでしてれば！」

子供二人に“ブラコンの神”が、そう言って、最後に“シスコンの神”に振る。“シスコンの神”は、それに突っぱねるように答えた。

だが、それにより子供二人が泣きそうな顔になる。

「――っ！　……わかったわよ！　構えばいいんでしょ……」

恥ずかしいのか、“シスコンの神”は顔をそっぽに向けて、そう言い放った。それに子供達は大喜びである。

それを“ブラコンの神”が宥めて、再び食事に戻った。

第六話　僕は遊びが好きだ……（後書き）

神々の食卓（笑）
どうも混沌の使者です。

大体ユアンの説明が、神の力『創造』のすべてですかね。少し＋αがありますが。
ちなみに神によって『創造』は、違います。

「……（スィ～）」

平然と前を横切るな。

コ【バカの前は通っていいって、法律を知らんのかクズ】

知らん。てかそんなもんねぇ！

「……（とてちてとてちて）」

だから横切んな。

「……（むしゃこらむしゃこら）」

そして食うな。それに菓子ばっか食ってると、太るぞ。

コ【女の子にそんなこと言うなんて、デリカシーが無さ過ぎる。シネ】

調子乗んなよごらぁ……！

「……（ピュー）」

待てやこの野郎！！（ダーッ）

第七話　僕は遊ぶことが好きなだけ……。え？　サブタイトルが被ってる？　そ

遅くなりました。

いやはや久し振りの大学とは忙しいですな。

今回は、ほのぼの８０％、ギャグ（っぽいもの）２０％の構成となっています。

それではど～ぞ～♪

第七話　僕は遊ぶことが好きなだけ……。え？　サブタイトルが被ってる？　そ

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「よし、捕まえた！」

「捕まっちゃった～♪」

只今、ユアンとヴィヴィオが、お外で鬼ごっこ中。二人共、非常に楽しそうだ。

「よ～し、ヴィヴィオ、次は遊具で遊ぼう！」

「遊具？」

ユアンが上機嫌にそう言って、ヴィヴィオが疑問符で返す。ユアンは『創造（クリエイト）』と、口にすると、“すべり台”が出現。形は、階段があり、滑る台が螺旋を描いている。

「わ～！　なにこれ～♪」

「これはこうやって、階段から上って、ここで滑るんだ」

「おもしろそう！」

ユアンが自分で実践し、ヴィヴィオがそれを見て、感嘆の声をあげる。

ヴィヴィオも階段を上り、滑る。ちなみに着地点には“砂場”を用意した。砂場は子供の遊び場です。しかし、二人共楽しそうだ。なんというか無邪気である。

「よ～し次はこれだ！」

一頻り滑った後、ユアンが再び『創造』を発動。すると“ブランコ”が出現。そしてユアンは座り乗りを実践する。ヴィヴィオもそれを真似して、遊び始めた。ヴィヴィオにとっては、こういう遊具のようなものは、初めてである。そのためか、いつも以上にはしゃいでいるように見える。ちなみにヴィヴィオは座り乗り、ユアンは立ち乗りだぞ。

〈ユアン君……僕といるより、楽しそうじゃないか……〉

〈当たり前です〉

“愛の神”からの戦慄するような声に、ユアンは素っ気なく返す。それに“愛の神”は、まるで、ボディブローを貰い、弱った所をアッパーで、顎をかち上げられた瞬間、雷が全身を襲ったようなショックを受け、神話が切れた。

〈そんなことより、大丈夫ですかユアン。そんなに『創造』の力を使って〉

〈大丈夫、問題ないです。これぐらいなら〉

〈……そうですか〉

だが、次の瞬間“眼鏡の神”から、神話が届く。どうやら、ユアンを心配してるようだが、ユアンはなんでもないと言う。“眼鏡の神”は向こうで、少し怪訝そうな顔をしたが、言及はしなかった。そして神話を切った。ユアンは、一体何しに神話をしたんだろうと、不思議に思うのだった。

「どうかしたのユアン？」

ヴィヴィオはすでに呼び捨てである。おそらくヴィヴィオの中で、遊んでくれる人ではなく、遊ぶ人になったのだろう。言わば、友達感覚である。ユアンの子供っぽい無邪気な所が、そうさせたのかもしれない。

「いや、なんでもないよ」

静かになったユアンを心配するように、問いかけるヴィヴィオに、

ユアンは苦笑いしながら答える。

「よ～し、次いってみよー！」

「おー♪」

ユアンは再び明るくなり、その場には、段々と遊具が増えていく。
“シーソー”、“鉄棒”、“雲梯（うんてい）”、“ジャングルジム”と、そこには色々な遊具が、置かれていった。

そして、夕方――

「あらあら……」

アイナさんが、そこに来たとき、呆れるような驚いたような、そんな声を上げる。
その一画は、様々な遊具が犇めき、まるでどこぞの幼稚園か保育園である。
そこで、ユアンとヴィヴィオが、砂場で、泥だらけになって、遊んでいた。

「はぁ……ユアン君！　ヴィヴィオ！」

その声にビックリするユアンとヴィヴィオ。
ため息を吐いたアイナさんは、何故こんなものがあるのか、そんなことはどうでもよかった。ただ、今のユアンとヴィヴィオを見て、言うことは決まっている。

「こんなに汚して！　早くお風呂に入ってきなさい！　服は私が用意しておきますから」

「「は、はい……」」

怒られた二人は、少ししょぼんとして、風呂場に向かった。

「……これ……一体どこから持ってきたの……？」

アイナは、そう独りでに呟いた。と、その時、声が聞こえた。

「ユアン、一緒に入ろ♪」

「うん。洗いっこだね」

そんな会話が聞こえた。確かにまだヴィヴィオは、5、6歳だ。男の子と入るのに、特に問題はないかもしれない。しかし、やはり

ユアンは、１５、１６くらいの男の子である。家族ならまだしも、他人な訳だ。さらに、ヴィヴィオは、なのは隊長から、預かった大切な子。万が一が、あってはならない。別にユアンを信じてないわけではない。万が一、万が一である。
ということで。

「待って、二人共！　私も入るから！」

アイナも急いで、二人の元に行ったのだった。

結局、アイナさんとヴィヴィオが、女湯に入り、ユアンは男湯に入っていった。

「は～、すっきりした～」

ユアンは晴々しい顔で、風呂から上がった。
そして体を拭き、服を取る。それは全身ピンクのパジャマである。これは、一枚しか服を持っていないユアンに、アイナさんが貸したものである。実はユアンが寝る際はこの服でした。ちなみにサイズは、大体同じだった。ユアンとアイナさんの身長は一緒くらいである。

しかし、この色は抵抗あるよなぁ。でも僕お金って持ってないしなぁ。

そう思いながら、服を着ていく。その時、仄かにアイナさんの良い香りがする。

ふあっ……なんか良い臭い……ハッ！？　な、何してんだろ……早く出よ。

恥ずかしくなったユアンは、顔を赤く染めて、風呂場を出ていった。

そして、ユアンは風呂場を出たすぐのちょっとした休憩場所で、涼んでいると、アイナさんとヴィヴィオが、こちらにやってきた。

「ユアン君、お待たせ。食堂に行きましょう」

「はい」

「うん♪」

そうして、三人で廊下を歩いていく。

そこで、ヴィヴィオが、アイナさんと繋いでいる手の逆の手で、ユアンと手を繋ぐ。

それに気付いたユアンが、ヴィヴィオに顔を向けると、ヴィヴィオは――「えへへ～♪」――と嬉しそうに笑って、腕を振る。

それはまるで仲の良い夫婦のようだった。

食堂にて。

「ほら、ヴィヴィオ、ご飯粒ついてる」

アイナさんが、ヴィヴィオの頬についたご飯粒を取ってあげる。

「あ、こっちにもついてるよ」

次はユアンが逆側から、ご飯粒を取り、自分の口に含む。そういうことを平気で、やってのけるのがユアンです。

ヴィヴィオは――「ありがとー♪」――と、言って、また食べ始める。

そして、大体食べ終わった頃――

「あれ？　ヴィヴィオはピーマン食べないのか？」

「う～、ピーマンきら～い」

「ダメよヴィヴィオ。好き嫌いしちゃ」

「う〜」

アイナさんに言われ、ヴィヴィオはピーマンとにらめっこをする。
そこで、ユアンは、ふむと考えるとピンッと浮かんだことを言ってみる。それは――

「じゃあ、それ食べれたら、僕が楽しい物をあげるよ」

これである。子供というのは、物に釣られやすい心理である。

「楽しいもの？」

「うん」

「楽しい……う〜、パクッ……」

ヴィヴィオはユアンの楽しいという言葉に反応し、嫌々ながら、食べ始める。
そして食べ終わり――「たべた〜」――と、やりきったような声を出す。

「えらいねヴィヴィオ」

アイナさんは食べ終わったヴィヴィオの頭を撫でながら褒める。
ヴィヴィオは嬉しそうだ。ちゃんと良いことをしたら、褒めるんだぞ。子供に対する鉄則だ。怒ったら、いけないことと勘違いするからね。多分……。

「ユアン、楽しいもの」

ヴィヴィオは、思い出したように、ユアンに向き直り、そう言う。

「うん。それでは」

ユアンはヴィヴィオの前に、握りしめた手を差し出す。ヴィヴィオはワクワクしながら、ユアンの手を見る。アイナさんも、気になるのか覗き込んでいる。

「とう！」

バッと手を開くと出てきたのは、3個のお手玉。アイナさんは、そこはかとなく期待してただけに、ガクッとくる。だが、ヴィヴィオはよくわからないため、何だろうと不思議な目で見る。

「ヴィヴィオ、これはこうやって遊ぶんだ」

ユアンは立ち上がると、お手玉をどこぞのサーカス団のように、巧みに上に飛ばしては、落ちてきたのをキャッチしていく。慣れてくると、いつの間にか数が増え、5個に、さらに増え7個、えぇ～い大サービスだ！　これも持ってきな！　といった感じに、とうとう13個。しかも足まで使いだした。超人かこいつは。すでに何だかわからない。

ユアンはフィニッシュと言わんばかりに、すべてを上に投げ、落ちてきたのを取っていく。

が、取った先から、お手玉は消えていき、最終的に3個残った。

「はい！」

ユアンがポーズを決めるのに、呆気にとられたアイナさんにヴィヴィオ、更には食堂にいた他の局員まで――「おぉ～！」――と、拍手をし出した。

それにユアンは――「どうもどうも」――と、軽く答えた。

「すごいわねユアン君」

「あはは」

席に座ったユアンに、アイナさんが、素直な感想を述べ、ユアンが照れるように頭を掻く。

「ヴィヴィオもやる！」

そこでヴィヴィオが、身を乗り出し、ユアンに、おてだまちょうだいといった感じに、両手を出す。
ユアンは、ヴィヴィオにお手玉を渡してやり、ヴィヴィオはお手玉をし出した。

「えと……ユアン君の……『創造』だっけ？　すごいのね。ヴィヴィオもこんなになついちゃって」

「いや、あの僕はただ遊ぶのが、好きなだけで、すごいとかそんなことは……！」

「謙遜しなくていいのに」

慌てて否定するユアンを少し可愛いなと思いながら、見つめるアイナさん。それにユアンがドキッとする。が――

「ユアン～、ユアンみたいに出来ないよ。どうやってやるの？」

――ヴィヴィオがユアンの服を引っ張って、聞いてきたため、ユアンはヴィヴィオに教える始めた。

「ユアン君、ヴィヴィオ、ここじゃあ邪魔になるから、部屋に行きましょう」

「「は～い」」

アイナさんがそう言って、アイナさんの部屋に向かうことになった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ここは神々が犇めく神界と呼（ｒｙ

てな訳で、ここは神界。

ツンツン、ツンツン。

と、黒焦げになっている“愛の神”を、“ロリコンの神”と“ショタコンの神”が、棒を使って、つつく。

と、ここで、前回し忘れた“ショタコンの神”について。

黒い短髪で、見た目６歳前後。こら、そこ、ユアンと若干性格似てね？　とか言わない。

「やりすぎじゃねぇか“雷の神”？」

「サウテ、クリウ」

“太陽の神”が、そう言うのに、“雷の神”と言われた青年……っぽい、女性は、よくわからん言葉で返す。

“雷の神”は、紫色の髪で、肩ぐらいまでの長さ。どこか虚ろな瞳で、体に常に静電気を纏っている。見た目17歳前後といったところか。やけに背が高い。

「……【こいつ、きらい】か？」

「……（こくっ）」

「面倒だから、ちゃんと話せ」

「ツュアナヒニストウレ」

「ちゃんと話せっつってんだよ……！　【ちゃんと話している】じゃねぇだろ……！」

“太陽の神”は、一定距離を保ちながら、凄むが、距離があるので凄んでも、対して怖さがない。それは何と言っても静電気を纏っているため、触るとビリッとする。まあ、そこまで強力ではないが、触りたくはない。だから、近付きたくないのだ。

「ダメだぞ～。“太陽の神”に迷惑かけちゃ～」

そこに現れたのは、何だか間延びした声の少年である。“雷の神”の肩に捕まるとそのままぶら下がっている。彼は“地の神”。彼は体質的に電気が、効かないので、こうして、平気でさわることが可能だ。

茶色い短髪で、見た目１０前後である。

「ザモアニシウ（ごめんなさい）……」

「わかればいいよ～」

シュンとする“雷の神”を“地の神”は、片手で、“雷の神”にぶら下がり、もう片方の手で、よしよしと撫でてやった。どうやら二人は仲良しのようだ。

「それより、ユアンの事ですが、彼の“創造力”はどれほどか知ってる人はいますか？」

“眼鏡の神”の発言に皆、シーンとなる。誰も知らないようだ。

「まあ知らんのも仕方なかろう」

「そうですね。名前ならば、伝達されますが、個々の能力は、伝達されなせんからね」

「大体神々が、勝手に系列を作っているせいで、数もちゃんと把握しきれてないでしょう？」

それに“風の神”、“水の神”、“氷の神”が意見を言う。

ちなみに、神々は、その神の顔を見れば、スッとその神の名前が、浮かぶようになっている。数については、把握しきれていないのが、実状だ。

まず、次元世界のように生殖行動をして、神が生まれるわけではなく、ただそこに在ると、自分が認識したとき初めて、生まれるというのだ。つまりは、神々にもどうやって生まれたのかは、知らない。まあそんなことは、神々にとって些末なことだろうが。

「仕方ありませんねぇ」

“眼鏡の神”は、渋々といった感じに、黒焦げの“愛の神”に近付く。

「ユアンがあなたに助けを求めていますよ」

「ユアン君！！？　そうか！！　やっと僕の愛に気付いたんだね！！！」

“愛の神”は一瞬にして黒焦げが治り、上半身裸になり、涙を流して感動した。その際、ツンツンしていた“ロリコンの神”と“ショタコンの神”が、飛ばされたのは、言うまでもない。
そして、“愛の神”っぷりには、皆ドン引きだ……。

「とりあえず、脱いだものを着て、話を聞きなさい」

「ユアン君！！　今、僕が助けるよ！！」

「話を――」

「――ユアンくーーーん！！」

「聞けと――」

「――ユアンっぐぎゃあああぁぁぁぁあ！！？」

「はぁ……」

話を全く聞こうとしない“愛の神”に、“雷の神”が雷により、再び黒焦げにした。“愛の神”は気絶。それに“眼鏡の神”はため息を吐くのだった。

第七話　僕は遊ぶことが好きなだけ……。え？　サブタイトルが被ってる？　そ

ユアン×ヴィヴィオ＝ほのぼの。鉄壁の方程式。
どうも混沌の使者です。

そういえば、ヴィヴィオが呼び捨てにする主人公って、珍しいような……私の気のせいかな。

今回は、ほのぼのが大半でしたね。
ギャグを期待していただいた方、申し訳ありません。

〇【土下寝して謝れ】

さて、いつ頃物語を動かしますかね。

「……（クイッ、クイッ）」

でも、まだフォワード勢や、隊長陣とも大したアクションを起こしてないですしねぇ。

〇【おい、クズ】

まあ、これはタグにも、ゆっくり進むって、書いてありますし、焦らなくてもいいとは思うんですが。

「……（バタバタッ）」

あ、ごめん。ちゃんと相手してあげるから。

「……（ヒクッ、グズッ）」

〇【ありがとよ、クズヤロウ】

待てゴラァ！！（ダーッ）

「……（ピューッ）」

第八話　僕どうなるの……（前書き）

今回は――

シリアス５０％

ギャグ（らしきもの）４０％

ほのぼの１０％

ほどの構成です♪

ちょいシリアス多めかな？

でもシリアスかな（汗）

まあ、そんな感じですが、どうぞ♪

第八話　僕どうなるの……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

暗がりで、周りには人がいない場所。そこで一人の女性が、通信を開いて、何かを話していた。それは――

「主、ユアンは特に何も行動を起こしてはいません」

《そうかぁ。フェイトちゃんには、悪いけど、スカリエッティのアジトから、出てきてる所を見れば、仲間の可能性もあるしなぁ》

シグナム。そして、通信相手は、はやて。

「そうですね」

《けど、更正施設の子達と話したんやけど、そんな子知らんて。スカリエッティにも、聞いてみたんやけど、やっぱ知らんて》

「スカリエッティとだけ繋がってるとみれば、まだ警戒する必要はあるでしょう」

《そうやね。あの子の力も、少し気になるしな。明日はその事も含

めて、聖王教会の方にも出向いてみるわ》

「はい、お気をつけて」

《そっちもな》

そうして、通信が切れた。シグナムは一人佇み、ユアンが今いる部屋――アイナさんの部屋を見る。

しかし、どうにも何か目的があるようには見えんな。だが、状況を見る限り、スカリエッティと繋がってる可能性が高いのは確か。しかし、何の証拠もないのも確か。警戒を続けるしかないか。

シグナムはそう考え、遠くからの監視を続ける事にした。

アイナさんの部屋にて。

「う～、出来ない～」

ヴィヴィオは、お手玉が出来ない事に悔しがる。そんなヴィヴィオをユアンが、優しく口頭で教えたり、実際にやってみたり、それ

を穏やかな瞳で見つめるアイナさんがいたりと、そこにはのどかな空気が流れていた。

「こうだよヴィヴィオ」

「こ、こう？」

「違う違う。こうだよこう」

「う～、わかんない～」

すると、ヴィヴィオが、あまりに成功しないせいか、お手玉を投げ捨て、バタンッと後ろに、不貞腐れるように倒れる。

「ヴィヴィオ」

「アイナさん？」

「もう少し頑張ってみない？」

「でも～」

「きっと、ヴィヴィオがお手玉してる姿見たら、ママ達は、すっごく喜んでくれるわよ」

「なのはママが？」

「うん」

「フェイトママも？」

「うん」

「……がんばる」

アイナさんの説得に、ヴィヴィオは、考え直し、ママ達に褒められたいと思い、再び、お手玉を始めた。

そして、時が経ち、ユアンは自らの部屋に戻ることになった。

「……」

ユアンは宿舎の廊下を、黙りながら、歩いていく。が、途中で止まり、後ろを向く。

「あの……出てきていいですよ？　えと……シグナムさん」

「気づいていたのか」

「いや……その、それだけ敵意を向けられると、気づかないわけにはいかないというか……なんというか……」

ユアンはシグナムの監視に気づいていた。シグナムは素直にユアンの前に出る。ユアンは切れ長の瞳に、睨まれて少し萎縮する。

「……私は遠回しなのは苦手だ」

「はあ？」

シグナムが急にそう言い、ユアンは疑問符を浮かべる。

「単刀直入に聞く。貴様の目的は何だ」

それにユアンは一瞬ドキンッとなった。別にこの機動六課に、用があるわけではないが、この次元世界には用がある。

「いや、そんな目的なんて……」

「ならば何故スカリエッティのアジトから、出てきた」

ユアンが誤魔化すように苦笑して、言うのに、シグナムはさらに追求していく。だが、そのシグナムの追求の言葉に、よくわからん単語――『スカリエッティ』を発見したユアンは、疑問符を浮かべた。

〈スカリエッティっていうのは、君が出てきた施設の主だよ〉

〈あなたは……？〉

〈“探偵の神”。僕に続いて〉

〈え……あ、はい〉

助け船を出してくれたのは、“探偵の神”。ユアンから見れば、初見なため、ユアンは少し緊張気味だ。元々、“探偵の神”は、中々姿を現すことがないため、こうして、関わるのは珍しいことだ。

〈以前話したと思うのですが〉

「以前話したと思うのですが……」

「あの話を信じろと？」

ユアンの言葉に、シグナムは誤魔化し効かないといった雰囲気で、返してくる。

〈わかりました。本当の事を話します〉

〈え～！？　いいんですか！？〉

〈いいから続けて〉

「わかりました。本当の事を話します」

ユアンのその言葉に、シグナムが警戒を強める。自白する以上、何か仕掛けてくると思ったからだ。

〈実は僕〉

「実は僕……」

ユアンはドキドキである。ここに来て、バラすとか。まず、僕がどうなるのかとか色々と考える。そして――

〈ここなら、ハーレムが作れると思ったんです！〉

「ここなら、ハーレムが作れると思ったん――って！　何で！？」

まさかの“探偵の神”の発言に、ユアンはもう訳がわからない。とりあえず、ツッコミを入れた。そんなユアンの様子に、シグナムは思わず、力が抜ける。

「貴様、そこまで、私を愚弄するか」

だが、シグナムは次の瞬間には、デバイスを起動し、レヴァンティンをユアンに突き付ける。

「あ、いや、その違くて、えっと……」

〈“探偵の神”！　何て事を！〉

〈ああ、御免ねユアン君。火に油を注いでしまったみたいだ〉

その言葉で、“探偵の神”の神話が切れた。ユアンは、どうすれば！？　と考える。しかし、一向に答えが出ない。

「表に出ろ。貴様を見極めてやる」

「う……うあ、その……」

シグナムはユアンの様子に痺れを切らし、そう発言した。ユアンはもう逃げることが出来ず、大人しく外に出ることになった。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

【隠恋慕】

昔々、女性は恋心を隠していた。それを慕うことで誤魔化して。

男性はそれを見極めなくてはならなかった。

そして男性は女性に隠された恋慕の情に気づくことで、幸せを手に入れた。

その形は歪みを経て、鬼（男性）によって町民（女性）の心（恋慕の情）は、喰らわれるとされた。

それは現代において、“かくれんぼ”として、未だ形を残している。

※

これは作者の作り上げたでっち上げです。

事実とは一切関係ありません。

△△△△△△△△△△△△△

どうする……！

シグナムは切羽詰まっていた。それはこの状況にである。自分が作り上げたのだが、シグナムは別にこんなことがしたかったわけではない。本来は、ただ警告だけのつもりだったのだ。

だが、こんな状況になってしまった。

今、シグナムとユアンは、訓練場で向き合っていた。平坦で、何もない状態だ。

シグナムは考える。ユアンの態度に思わずムカついて、ここまで連れてきてしまったが、だからといって、ホントに手をあげるわけにもいかない。確かにユアンが怪しいのは事実だが、なんの証拠もない今、丸腰のユアンに剣を向けるのは、やはり間違っている。だが、ここまで連れてきておいて、下がるなどシグナムには、出来ない芸当である。

故に答えの出ないループに嵌まってしまい、未だ動けずにいた。

どうしたんだろう？

逆にユアンは、一体どうしたのかとシグナムを見る。

ユアンはどうやって切り抜けるかで、頭が一杯だったのだが、何だかここに来た途端、シグナムが何か慌て出したような態度に、今度は頭が一杯になり始めた。

てっきり、シメられるのかと思ったけど……違うのかな……？

もしかして、他に目的が？　……そうか……きっと遊びたいんだ！

どうしてそうなった？　という疑問が浮かぶが、ユアンは基本的に皆遊ぶことが、好きだと思っている。そのため、迷うと辿り着く答えが、遊ぶことになりがちだ。

「シグナムさん」

「……何だ？」

ユアンに急に話しかけられ、シグナムは思考のループから抜け出す。

「遊びましょう！」

「……は……？」

だが、そのユアンの言葉に、シグナムは再び思考の海に飛び込んだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ここは神々が犇めく神界と（ｒｙ

「クスッ」

ここは“友愛の神”の家の屋根の上。そこで、“探偵の神”がほくそ笑む。

「貴方は悪い人ですね」

「クスッ、君には負けるよ」

そこに“眼鏡の神”が来て、“探偵の神”と会話する。

「ユアンの実力を確かめるために、けしかけるなんて真似、私はしませんよ」

「クスッ、でも知りたいんでしょ。ユアンの秘密を」

「知っているのですか？」

「クスッ……どうだろうね。だけど、少なくとも君も知ってるはずだよ。いや、全員ね。彼は有名だから」

「有名？　どういう――」

「アッハッハッ！　何だ君達、こんなところで、一体何をしているんだい？　ハッ！　そうか……わかったよ。愛だね……愛を語っていたんだね！」

そこに空気を読まない男“愛の神”の登場。シリアスな雰囲気は払拭された。

「貴方はどこから湧き出てきたんですかねぇ……！」

「“雷の神”にやられて、のびてたんじゃ？」

「アッハッハッ！　愛がそこにあるならば、僕がいないと始まらないじゃない――か！」

そう言って、服がはだけていく“愛の神”。てか、どこにも愛はなかったんだが……“愛の神”には、あったのかもしれない。

この後、“眼鏡の神”と“愛の神”の壮絶（内容が噛み合わない）な口争が始まり、それを横で、クスクス笑いながら見ている“探偵の神”の図式が出来上がった。

その頃、家の中では――

「わ～い♪」

「わ～い♪」

部屋の中を“ロリコンの神”と“ショタコンの神”が、走り回って、遊んでいる。うんうん、無邪気である。

「違うんスよ！　俺っちだって……俺っちだって……別に皆が集まるのに、文句なんか言いたくないんス！　でも……でも……勝手に来て、勝手に飯食って、勝手に文句言うなんて、俺っちだって、怒りたくなりますよ～！」

「そうかそうか。よし！　いいぞ、私の胸で思い切り泣け！」

「う……う……“紙の神”～！」

こちらでは、酔っているのか、“友愛の神”が愚痴を言い出し、最終的に一緒に飲んでいた“紙の神”の豊満な胸で、涙を流していた。何気に羨ましい事してんじゃねぇよ。

「詰みだ。また俺の勝ちだな」

「くっ……何故貴様に勝てない……！」

「テメェみてぇなアホにゃあ、一生勝てねぇよ！　ア・ホ」

「何だと……！　もう一度言ってみろ！」
「何度でも言ってやらぁ！　アホアホアホ！　ア・ホ」
「ぶち殺す……！」
「やってみろ……！」

こちらでは、“太陽の神”と“月の神”が、いがみ合っている。どうやら、将棋をしていたようだ。勝ったのは、意外にも“太陽の神”。案外、頭は良いようだ。それより、こいつら、喧嘩ばっかだな。

「トリィィ！　猫の旦那！　犬の旦那！　お久し振りトリ！」

トリ？　ツッコんだら負けだツッコんだら負けだツッコんだら負けだ……！
ふ～、てなわけで、彼は“鳥の神”。鳥のような姿をしていて、手は羽根のようで、全体的に白め。帽子を被っている。

「また騒がしい奴が来たにゃ……」
「久しぶりワンねぇ。今日はどうしたワン？」
「何か面白いことしてるって聞いたので、来ましたトリィ！」

そんな感じで、合流した“鳥の神”。とにもかくにも騒がしい。

「ばあさん……」

「出てこない」

「すまんのぅ……それで、水を――」

「イヤです」

「そうか……」

“トイレの神”と“トイレットペーパーの神”が、会話を交わす。だから、何しに出てきた！　ハッ！　ツッコんでしまった……。俺の負けか……。

「あの……水なら私が」

「いいのよ“水の神”。甘やかしたら付け上がるから」

「ですが……」

「いいから」

「はい……」

“水の神”が“トイレの神”を不憫に思い、提案したのだが、“トイレットペーパーの神”が封殺した。全く容赦がない。てか、何だこの会話？　何故“トイレの神”は、そんなに水が欲しいんだ……。あ……トイレだから……流して欲しいのか……。

「いや、ちげぇだろ」

地の文にツッコミを入れるな。

「あぁ～、しっかし、よえぇなぁ！　“月の神”は将棋が弱いぜ～」

「ぐ……ぬぬ……！」

何度やっても“月の神”は、将棋で“太陽の神”に勝てず、何も言い返せないで悔しがる。

「イウトヂ（相手だ）」

「ほう、上等だ。来やがれ」

そこに“雷の神”が現れ、“太陽の神”に勝負を申し込む。それに“太陽の神”は威風堂々と答え、そのまま“雷の神”との勝負が始まる。

５０分後。

「バカな……」

「“雷の神”の勝ち～」

“太陽の神”は呆然と呟いた。“雷の神”は“地の神”により、両手を挙げさせられて、喜んでいた。

「……もう一回だー！」

“太陽の神”はプルプルと震えだすと、悔しかったのか、もう一回勝負を申し込み、また戦うことになった。

だが何度やろうとも“太陽の神”が、勝つことはなかった。それを“月の神”が、ニヤニヤと好い気味だといった感じに、見ていた。

「ちっくしょおぉお！！」

“太陽の神”の絶叫が木霊したのだった。

第八話　僕どうなるの……（後書き）

ユアンピンチか……！
どうも混沌の使者です。

まあ、全然ピンチじゃないかな（笑）
さあどうなるかな～（笑）

〇【そういや、更新遅かったんじゃないか？】

出たな！　妖怪“紙で会話する口の悪い女”！

「……（ウルウル）」

うぐ……は……貴様……！　可愛い顔を俺に向けるな……！

〇【変態】

……（ダーッ！）

「……（ピューッ！）」

では♪

第九話　僕もしかして……やっちゃった……？（前書き）

は～い、皆さん混沌の使者だよ☆

てなわけで、今回の構成は――

シリアス（もどき）２０％

ギャグ（もどき）３０％

バッキャロウ５０％

――の構成です♪

ゆっくりしていってね♪

第九話　僕もしかして……やっちゃった……？

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

遊ぶだと……？

シグナムはユアンの言葉に、頭が混乱する。シグナムは思考の海には入っていたが、ちゃんと威圧していた。並みの奴なら、尻餅を付くだろう威圧だ。その威圧を受けながら、急に――「遊びましょう」――なんて、言葉が出るだろうか。そんな風に考える。

やはり、私を愚弄してるのか……！

そう考えると、少しイラついてくる。先程も真剣に聞いたこちらが馬鹿であるかのような、返答をしていたし。シグナムにとっては、非常に不愉快である。

「貴様……！　一度ならず二度までも、私を愚弄するのか！」

「ち、違いますよ！　僕はただあなたと楽しく遊びたいだけです！」

シグナムは剣型のデバイス――レヴァンティンを取り出し、ユアンに突き付ける。それに焦ったユアンは、即座に弁明。
シグナムはそのユアンの言葉に、さらに混乱する。

えぇい！　何なのだこの男は！　くっ……！　なまじ嘘をついてるように、見えないのが質が悪い……！

ユアンの純粋な言葉は、シグナムを惑わせ続ける。
一方ユアンは――

何して遊ぼう？

すでに頭の中では、遊ぶことが決定したようだ。

二人だし……鬼ごっこはダメ……というより、何だかシグナムさんって、攻撃されそうでちょっと怖いな……あ、だったら『世界創造』しちゃえば……って、あれじゃあ負荷が……そういえば、“かくれんぼ”は“愛の神”とやった時、何も効果が現れなかったな……。まあ、僕が負けたら、僕は気絶したけど。

ユアンはそう考える。どうやら、『世界創造』は確かめないとわからないようだ。まあ“愛の神”で試しているので、大丈夫かと思うユアン。
それがあんなことになろうとは、思いもせず……。

「『世界創造（ワールドクリエイト）、“かくれんぼ（ハイド・プレイ）”』」

「何！？」

思い立ったら即実行のユアンは、『世界創造』を使う。その瞬間、世界は光に包まれ、理を変え、姿を変える。

シグナムはゆっくりと瞼を開け、辺りを見回す。

そこにあったのは、広大な森であり山。草木が生い茂り、太陽が燦々と降り注ぐ場。

そんな状況にシグナムは――

どうなっている！？

と、慌て出す。

訓練用のバーチャルは、発動させていないはず！？　さらに、この太陽……確かに夜だったはずだ――！？

その状況は異様であり異常。まるで、先程とは違う場所に転移されたかのような――

だが、それはありえん！？　そんな反応はなかったはずだ！？

そう、そんな反応は皆無だった。もし、転移されたとしたら、その残滓のようなものが、残っているはずである。しかし、それがない。つまりは、転移はしていないということだ。

「さあ、遊びましょう、シグナムさん」

「貴様！　一体何をした！？　言わなければ、斬る！」

そんな考え事をしていると、ユアンから声がかかる。それにシグナムの混乱した頭は、ユアンからすべて聞き出せば良い、という強引な手段を思い付く。

「えと……無駄ですよ。ここでは攻撃の意思は、すべてキャンセルされますから」

レヴァンティンを突き付けられたユアンは、そう口にする。それに、馬鹿にされたと思い、冷静さを欠いたシグナムの一閃がユアンを襲う。

しかし――

「な――ッ！」

ユアンの手前数センチというところで、レヴァンティンが止まる。どんなに力を入れても、それ以上押しきれない。
それにシグナムは、一旦下がる。

どういう事なんだ……一体私に何が起こっている……。

訳がわからなくなったシグナムは、呆然とする。実質、シグナムの一撃は、リミッターが架かってたとしても、そう簡単に防げるものではない。確かに優秀な魔導師なら、リミッター付きのシグナムの攻撃をガード出来るかもしれない。しかし――

奴は魔法を使っていない……。

そうだ。ユアンは魔法を使っていない。それどころか何かした素振りもなかった。

「それじゃあルール説明しますね」

そんなシグナムを置いて、ユアンはルール説明をし出した。
シグナムは何となくだが、とにかく今は何も出来ないと悟り、話を聞くことにした。少しだけだが、冷静さを取り戻し始めたようだ。ここで立ち直せるのは、やはり長年の経験に因るところだろう。並みの奴ならば、混乱して終わりだ。

「ルールは“かくれんぼ”と同じで、僕が鬼をやるので、シグナムさんは僕に見つからないように逃げてください。ちなみに逃げる側は、隠れる場所を変えて構いません。制限時間は２０分。それまで、僕に見つからないように」

ユアンはそうルールを説明した。シグナムは考える。この際、今のこの場がどこなのかや何故攻撃を防がれたかなど、どうでもいい。今は、とにかくこの異様な世界から、出ることを考えなければならない。

「それじゃあ、僕が5分間、数えたらスタートですよ。一、二――」

そうして、ユアンはシグナムに背を向け、眼を伏せて、秒数を数えだした。シグナムは――

情報を整理しろ。

立ち止まり、そう自分に言い聞かせて、頭を冷やし、冷静さを取り戻していく。

第一に、奴には攻撃が通じない。これは私の勘だが、あの感触では不可能だろう。

第二に、あの光に包まれた瞬間、何かが起きた。少なくとも、奴

にとって有利な地に招かれたということ。言わば、ここは奴の領地（テリトリー）。迂闊な事は出来んか。
第三に、あのルール……ふざけてるようだが、ここが奴の領地ならば、その言葉を鵜呑みにしないまでも、考慮には入れなければならん。とにかく見つかるのは不味いな……。

そう考えたシグナムは、とにかくここを離れようとその場を去った。

そして、5分後。

「さて、シグナムさんはどこだろうな」

ユアンは準備運動するように、体を動かし、グッと膝を沈める。
その瞬間、ドンッという音と共に、ユアンの姿が霞み、木々の中に姿を消した。
そんな様子を上空から、見る影が一つ――

「速い……」

シグナムだ。

魔法を使わず、あれだけのスピードが出せる……一体何者なのだ、

あの男は……。

シグナムはそう考えながら、ユアンの行った方とは、逆方向に降りる。空にいては、見上げられれば、すぐに見つかるからだ。

しかし、上から見上げれば、何かわかるかと思ったが、あるのは樹だけか。転移魔法も使えん……つまり、ここは次元世界のどこでもない世界……なのか？　俄には信じがたいが……信じざるをえんか……。

「――ッ！」

と、その時、何者かの気配に、樹と草の影に隠れる。

「いないなぁ……」

ユアンだ。

バカな……奴は私とは逆方向に走っていったはず。まさか、もうこちらに来たのか……？　いくらなんでも速すぎる……まだ1分弱しか経っていないというのに……。

「あっちかなぁ？」

そして再び、ユアンは爆走を始めた。シグナムが近くにいるのに気付かずに。

フゥ……とにかく、ここは出なければ。だがどうすればいい……どうすればここを出られる？

シグナムは思考を巡らせるが、答えは出ない。とにかく、情報が少な過ぎるのだ。考えたところで、答えが出るはずもない。

そんなシグナムを他所にユアンは――

「いないなぁ」

かくれんぼを楽しんでいた。

シグナムさんは隠れるのうまいなぁ。全然気配もないし。でも燃えてきたぞー！　絶対見つけてやるー！

ユアンは心の中で意気込み、爆走を続ける。ユアンはとにかく走りまくって見つけるつもりのようだ。

この広大な森の中、２人の見つかるか見つけられるかの壮大なかくれんぼが、繰り広げられる。さあ勝つのはどちらか。

そして、ユアンはシグナムを見つけられないまま、１０分が過ぎた。

「見つからない……むぅ……やるなぁシグナムさん……これは何か考えないと」

流石に焦り出したのか、ユアンは立ち止まり、シグナムを見つける方法を考え出す。

う～ん。シグナムさんは気配を消してるし、この森の中……そんなことされたら、そう簡単に見つからないよね。気配か～……そうだ……シグナムさんって、何だか怒りんぼだし、挑発すれば、釣られて出てくるんじゃ……。

ユアンはそう考えると、スーッと息を大きく吸い込む。

「シグナムさんのバカーーー！！」

ユアンの大声が森中に響き渡った。そう口にしながら、ユアンは走る。

シグナムはというと。

「――ッ！　な、何だ……？」

その声に驚いていた。

まさか……挑発のつもりか……？　甘いな、私がその程度で――

―シグナムさんの怒りんぼーー！！♪―

しかし、何という声だ……森全体に響いているのか……？

―シグナムさんのアホボケカーース！！♪―

「……（ピクッ）」

い、いや、落ち着け私……これは奴の罠、みすみす引っ掛かるような私では――

―シグナムさんのおっぱいまじーーん！！♪―

「何だと貴様ーー！！」

ユアンに負けないほどの大声が、響き渡りました。

「ハッ！」

シグナムはつい声に出してしまい、後悔するが、その時間も惜しい。今すぐここを離れて――

「シグナムさんみーつっけた♪」

と、思ったシグナムだが、ユアンはいつの間にか、後ろに居り見つかってしまった。

「くっ……！」

それにシグナムが悔しげな表情を浮かべ、振り返り、ユアンを見る。その時――

「な――っ！」

シグナムは急激に体が熱くなり、顔が真っ赤に染まる。

「え？　あれ？　どうしたんですか！？　シグナムさん！？」

慌てたユアンは急いで、シグナムに駆け寄ろうとする。
シグナムはその瞬間、心臓が跳ね上がるような感覚に、ユアンは突き飛ばす。

「よ、よよ寄るな！」

シグナムは自分でもよくわからない感情の変化に戸惑う。その瞬間、ユアンの創り出した世界は、終わりを告げ、二人とも元の訓練場に戻ってきた。

「あの……」

「くっ……！」

シグナムはもうユアンといると、よくわからない感情に押し潰されそうになるので、すぐさま去っていった。
残されたユアンは――

え……え～と……まさか、何か副作用が……？　え？　え？　な、何！？　“愛の神”の時は何もなかったのに！？　どうしよう……。

まさかの出来事にユアンは、慌てふためき途方に暮れる。

一方シグナムは――

何なのだ！　何なのだこれは！？

今まで感じたことのない感情に戸惑っていた。今は顔の熱を拭うため、水道で顔を洗っている。

奴を見ただけで、体が熱くなる。心臓の鼓動が止まらん。

シグナムはそう考えながら、水面に映る自分の顔を見る。そこには頬を赤く染め、少し情けないような顔のシグナムがいた。シグナムはそんな自分の顔に、さらに水をかける。

違う！　こんな情けない顔が私のわけがない！　くっ……！　明日、奴に確かめてやる。

シグナムはそう決意し、火照る顔を涼まして、部屋に戻った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ここは神々が犇めく神界（ｒｙ

「さって、訊かせてもらおうか“愛の神”よぉ」

「洗いざらいな」

“太陽の神”と“月の神”が、“愛の神”に詰め寄り、脅してくる。

「何故、ユアンは『世界創造』を“２個”も使えるのですか？」

そして“眼鏡の神”が核心を突いた質問をする。それに“愛の神”が肩を竦める。

『世界創造』は一体の神に一つが、普通である。２個も持ってる奴など、見たことがない。

「オレが答えてやろうか？」

「“遊具の神”……」

そこに現れたのは、生意気そうなガキで、黒い短髪。頬にバッテン傷がある。

「お前らも覚えてる奴は覚えてんだろ。今から１２８年前の異端者」

その“遊具の神”の言葉に、ほとんどの神に衝撃が奔（はし）る。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

今から１２８年前。

少年はこの神界に生まれた。

いや、存在を認識した。

その瞬間、少年は『創造』を行い、遊び始めた。

これは通常あり得ないことである。

何故なら、『創造』や『世界創造』というのは、まともに使える

ようになるまで、約１０００年の年月を必要とする。
熟練するまでに、さらに約１０００年から約１５００年の時間である。そうして神として、動けるのだ。
そうして『創造』と『世界創造』について学んでいくのだ。
だが少年はここに存在するという認識が、生まれたと同時に、『創造』を使って見せた。
これは完全な異端だ。
野放しにしては、何が起こるかわからない。
故に神々は、少年を隔離施設に置き、そこで『創造』などの知識を与えることにした。
それが１２８年前の出来事。

▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲

「それがユアンだと言うのですか」
「フッ……その通りさ」
“眼鏡の神”の確認に“愛の神”が、すましたように言う。

「あの時の“可愛らしく”、“穢れを知らず”、“ただただ純粋で”、“美しかった”あの少年が、ユアン君さ」

「容姿は訊いていませんよ……！　くだらないことまで、入れないでいただけますかねぇ」

「何を言うんだ！　ユアン君のことをもっと知りたいんだろう！」

「そういうのを訊きたいんではないんですよ……！」

「まあまあ、落ち着けよな。オレが答えるからよ」

“愛の神”と“眼鏡の神”の口争に、“遊具の神”がストップを入れる。

「……そういえば、何故貴方はそんなことを知ってるですか？」

「オレか？　本来ならオレが、あいつをスカウトする気だったからだよ」

「だけどその前に“愛の神”がスカウトしたのさ」

「それも少し粗っぽいやり方でね」

“遊具の神”に続き、“探偵の神”、“コンプレックスの神”が

答える。

「やはり知っていたんですね貴殿方も」

「クスッ、僕は調査が主な仕事だからね」

「あらあら、私は元々あの子の処遇には、反対だったから、心配してただけよ」

ジトッと見る“眼鏡の神”に、“探偵の神”も“コンプレックスの神”も飄々と答える。

「まあいいでしょう。それにしても、何故ユアンは『世界創造』を2個も使えるのですか？」

“眼鏡の神”は責めても仕方ないと思い、論点を戻す。

「オレは知らねぇ。“愛の神”は知ってんだろ？」

「愚問だね。ユアン君の事で、僕の知らないことなど――ない！」

「いちいち脱がなくていいから、さっさと教えろや」

どこまでもふざける“愛の神”に、“太陽の神”が威圧しながら

喋る。

「つれない人達だねまったく……まあいいよ、実はね、僕もよく知らないの――さ！」

その“愛の神”の脱ぎながらの発言に、神々がずっこけた。

「ん？　どうしたんだい皆！　……そうか……わかったよ……僕の体に愛を感じすぎてしまい、目を背けたくなったんだね！　あぁ……わかるよ。僕も時々自分の体を見ていると、溢れんばかりの愛を感じ抱き締めたくなるからね！」

「……良くわかりました……貴方には消えてもらいます。“雷の神”」

「あばばばばば！？」

“眼鏡の神”がしばらくの沈黙の後、そう言い放ち、“愛の神”は後ろから、ポンッと肩に手を置かれた。その瞬間、手を置いた人物――“雷の神”の雷撃が、“愛の神”に迸り、“愛の神”は黒焦げになり、気絶した。

「おい、どうするよ？　つまり、あいつは生まれて、まだ百年ちょっとなんだろ？　呼び戻すか？」

「……いえ、まあいいでしょう。こんなものでも、一応、最上位ランク保持者が育てたんですから、『創造』は学ばせているはずですよ」

“太陽の神”の発言に“眼鏡の神”がそう答える。前述した通り、『創造』の力は何千年もかけて、理解し正しく使えるのだ。下手するとユアンは、まだ自分の『創造』を理解していない可能性があるために、“太陽の神”はそう言ったのだ。

「クスッ、僕もそれで良いと思うよ。彼のことをもっと調査したいしね」

「あらあら、私も賛成。彼は広く世界を知った方が良いわ」

続くように“探偵の神”、“コンプレックスの神”が発言する。その発言に、“太陽の神”が頭を掻き――「ハァ……わぁったよ。お前らがそう言うなら、俺はなにも言わねぇ」――と言って、その場に寝転んだ。

第九話　僕もしかして……やっちゃった……？（後書き）

おかしいな……もう少し、シリアスな感じのはずだったのに、結局シリアスが感じられなかったような……。
どうも混沌の使者です。

大変なことになりました。
私はどうしたら良いでしょう？（笑）
上手く書けるかな……この所詮俄野郎に……頑張ろう……。

〕【どうでもいいが、腹減った】

そこにお煎餅があるから、勝手に食べな。

「……（バリボリバリボリ）」

ふ～む、物語を動かすのは、大体１３、１４話くらいからですかね。

「……（バリバリボリボリ）」

そう言えば、章管理なるものを使ってみました（笑）
『～舞い降りし神～』って入れてみましたよ。物語を動かした際には――

「……（バッキボッキベキバキ）」

――また入れたいと思います。

「……（バキュペキバキボキボキ）」

もう何の音だよ！？　お前は一体何食ってんだよ！！

〇【煎餅だ】

ちっげぇよ！！　煎餅はそんな骨を、無理矢理へし折るような音でねぇよ！！

「……（ベキポキパキュモキュップベキバキ）」

ちょっと待てぇい！　今明らかに途中変なもん入れやがっただろ！

〇【気のせいだよ。頭の毛が、なくなるほどの冷水浴びて、出直してこいクズが】

チェェェストォォォ！！！

「……（スッ、サーッ！）」

ダーッ！

第十話　僕……シグナムさんに言いたいことが……（前編）（前書き）

遅れてすいません……。

ホントすいませんでした！

スランプはやはりつらい……。

面白くなかったらすんません。

今回の構成は……？

何だろう？

皆さんで判断してみてください（笑）

それではどうぞ♪

第十話　僕……シグナムさんに言いたいことが……（前編）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……眠れなかった……」

ユアンはベッドの上で、目の下にクマを作りながら、ムクッと起き上がる。

どうしよう……シグナムさんに何かが起きたのは間違いないんだよね……何か気まずいなぁ……あ～！　どうすれば～！

と頭を抱えるユアン。だが、〈こうしてても仕方ないか……〉と思い、ハァッと溜め息を吐いて、着替えて廊下に出るため、ドアノブを捻る。

―ガタッ！？―

「？」

すると廊下の方で、物音がし恐る恐る開けると――

「あれ？」

何もなかった。〈気のせいかな〉と思い、ユアンは食堂に行くことにした。

その逆の突き当たりの曲がり角に――

あ、危なかった……。

シグナムがいた。

って、なぜ私は逃げているのだ……。くっ……！　私はユアンに昨日のことを問い質しに、来ただけではないか……！　落ち着け……何を慌てている。私らしくもない。フッ、そうだ冷静になれ……冷静に……。

そう繰り返しながら、何故か完全に気配を消して、ユアンの後ろから声をかけようと段々迫っていくシグナム。そしてあと数センチ――

「ユアン君」

―ビュン！？―

曲がり角から、突如アイナさんとヴィヴィオが登場。

「あら？」

「どうかしましたか？」

「いえ……何かいた気がしたんだけど……気のせいかな？」

「ごはん！」

「そうね。ご飯にしましょう」

そうして3人になり、揃って食堂に向かった。そしてあの人は――

あ、危なかった……ハッ！　またしても……。くっ……仕方がないか……タイミングを見計らうか……。

シグナムは2人きりで、話せるチャンスを探すため、そのまま後をつけ回すことにした。

それから朝御飯の席。

「そういえばね、今日はフォワードのみんなが戻ってくるのよ」

「フォワードのみんな？」

「うん。病院の方で、入院してたんだけど、もういいみたいなの。あ、入院って言っても、大事をとってってだけだから。もう何ともないみたい」

「そうなんですか」

「ユアン君とも年齢が近いから、仲良くなれると思うわ」

アイナさんとの会話で、ユアンはふ～んと何かを考える。

まあ、確かに見た目は１５、６歳なんだろうけど、僕は１２８年生きてるんだけどな……まあ言わないけど……それより……。

ユアンは何となく目線のみを後方に送る。

何だか視線を感じる……多分シグナムさんだよね……？　どこにいるかわからないけど……シグナムさんは、ホントに気配を消すのが上手いな……本気で隠れられたら、全くわからないや……。

「ユアン君？」
「あ……はい？」
「どうかした？」
「い、いえ……」
「ユアン！　ごはん食べたら、おてだま教えて！」
「うん。いいよ」

ヴィヴィオとユアンはその約束を交わす。アイナさんはユアンの様子に、少し心配そうな顔をしたが、ヴィヴィオと会話したときのユアンの顔を見て、〈大丈夫かな〉と思い、再び朝御飯に向き合う。
そしてあの人は――

いつ話しかけるか……奴が1人なるのは……やはり夜か……仕方ない、今は通常の尾行を続けるしかないか……。

「あ！　シグナム副隊長！」
「ん？　ナカジマにランスターか。どうした？」
「あ、あの表の方に！？」
「何かあったのか？」

「何かあったというか……その……とにかく来てください！」

「わかった」

その会話でシグナムとスバル、ティアナは外に向かった。
そして、ユアンはその入口付近の会話が聞こえてしまった。

シグナムさん、そこにいたんだ……う～ん……やっぱり、シグナムさんの身に何が起こったのか確かめないとマズイよなぁ。これから使うときにアレだし……。

「よし！　アイナさん、ヴィヴィオ！　先に部屋に戻ってて。僕やることがあるから」

「ユアン君！」／「ユアン！」

2人がユアンの名を呼ぶが、ユアンは入口に走っていき、見えなくなった。
そうして、外のとある場所。

「エリオ！　キャロ！」

「ティアナさん！　スバルさん！　シグナム副隊長！」

どうやら、エリオとキャロはこの場を見張るために、既に現場にいたようだ。

「これは……」

ユアンがやった……。

シグナムはそれを見て、そういえばと思いだす。昨日行われたユアンによる『創造』を。覚えているだろうか？　ユアンとヴィヴィオが遊んだ際に、造り出した遊具の数々を。それがまだ残っていたのだ。

「これ、新手の悪戯でしょうか？」

「馬鹿スバル！　そんなわけないでしょ！」

「じゃあ何？」

「うっ……それは……」

スバルとティアナがそんな会話を交わす。それにシグナムはどうにも頭を抱える。どう説明したものかと。ユアンがやったと言えば済む話だが、正直突っ込まれた質問されると、全くわからない。む～っと考え込むシグナム。そんなシグナムを余所に、チビッコ（エ

リオ、キャロ）は、遊具を触り始めていた。どうやら興味津々みたいだ。

「そういえば、これそのままでしたね」

そこに皆の後ろからユアンが登場。この時、シグナムがビクンッと身体が揺れ、顔が紅潮したのだが、どうやら誰も気づかなかったようだ。シグナム以外の全員が振り返る。

「アナタは？」

ティアナが少し警戒しながら訊く。ユアンはその切れ長な瞳で、睨まれたため、少し萎縮する。

「えっと、その、僕はユアンっていいます。訊いてませんか？」

「ユアン……？　そういえば、どこかで……？」

「ティア！　アレだよ。最近、保護したっていう」

「ああ、そういえば……。アナタが？」

「はい、そうです」

その会話で、フォワード全員の警戒は解かれた。それにユアンはホッと一息。

「ユアン、お前が出したものだろう。さっさと片付けろ」

「あ、ハイ」

こっち向かない……怒ってるのかな……？　まあ、何かしらの影響があったはずだから、怒っててもしかたないよね……これからどうしよう……？

そんなことを思いながら、ユアンは昨日出した遊具に触れて、ドンドン消していく。

それにフォワード勢は驚きの表情。

「片付けました～」

そう言って、ユアンはシグナムに手を振る。それにシグナムは目線を合わせない。

う……やっぱり怒ってる……。どうやって謝れば……？　何が起こったのかわからないから、何て謝ればいいのかわからない……。いや、ここはスパッと「ごめんなさい」の一言で、いった方がいいのかな？

そんな感じで、うんうん唸るユアン。一方、あっちは――

何故……目が合わせられない……。

深刻な悩みを抱えていた。

何故だ。たかが奴の顔を見るだけではないか。そうだ、それだけだ……。

そうシグナムは言い聞かせ、うんうん唸るユアンを見る。その瞬間、ユアンもチラッとシグナムの方を向き、2人の目が合う。

―バッ！？―

一瞬にしてシグナムは目線を外した。その顔を紅潮させて。ユアンは〈やっぱり怒ってる！？〉と思い、再びうんうん悩み出す。

フォワード陣はその雰囲気に、どういう状況なのか、全くわからず立ちすくんでいた。

しかし、その雰囲気に耐えきれず、スバルが一歩前に出る。

「ね、ねえねえ、さっきの君が出したんだよね？　何なのあれ？」

「あれは『創造』といって――以下略――というものなんです」
「へぇ～、不思議～。レアスキルか何かなの？」
「まあそんなものです」

そんな会話をスバルと交わし、その後、自己紹介をしていないということになり、軽い自己紹介を終えた。

「あれ？　シグナムさんは？」

すると、すでにシグナムの姿はなくなっていた。

訊きたいことがあるのになぁ……こうなったら、徹底的にシグナムさんを探すか……。

「あのユアンさん」
「え？　何？」
「シグナム副隊長と何かあったんですか？」
「えっ！？　あぁっと……う～ん……かくれんぼを……したかな」

そのユアンの回答に、訊いたエリオは当然、他のフォワード勢も驚きの表情を浮かべた。
何といっても、あのシグナム副隊長がかくれんぼである。はっきり言って、遊んでいるところなど想像が出来ない。

「ほ、ほんとにしたの？」

「う、うん……」

スバルが食い気味に訊いてきたので、ユアンは少し引きながら答える。

そ、そんなに信じられないのかな……？　おかしいな。確か昨日はシグナムさんから、遊びたい雰囲気を持ってきたはずなのに。実は遊びが好きな人なのかと思ってたけど、違うのかな？

「ユアンさんってすごいですね。シグナム副隊長とかくれんぼが出来ちゃうなんて」

「そんなに？　そういえば、そのさん付け2人ともやめない？」

「えっ！？　でも……」

「年上ですし……」

そんなこと言ったら、みんな僕にはさん付けになっちゃうよ……。

ユアンは下に誰かいたことが無いので、そういうことにはあまり慣れていない。“愛の神”の系列の子たちとは、顔合わせ程度しかしていないし、元々神の中でユアンより年下などいるはずがないのだ。

「いいから、呼び捨てにしなよ」

「「……」」

「無駄よユアン。この子たち、まじめだから呼び捨てなんて無理よ」

押し黙る2人を代弁するようにティアナが話す。

そうなんだ……でもさん付けは慣れないな……何か他にないかな？

「じゃあ……ユアン……お兄ちゃんは……？」

キャロがおどおどとした口調で、そう言った。

「えぇ！？」

お、お兄ちゃんって！？　もっと慣れない！？　そ、そんなこと言われたことないし！？

「だ、だめですか？」

「い、いや、だ、だめというか……何というか……」

「じゃあ僕もユアン兄さんで……」

こっちからも来た！？　ど、どどどうすれば！？　そ、そうだ！　こんな時の神話を！

〈……〉

つながらないし！？　何やってるの！？　僕の目からこの世界を見てるんじゃないの！？　サボらないでよ！　この道楽神！

〈だ～れが道楽神だぁ……！〉

〈うひゃあ！？　た、“太陽の神”！？　何で心の中を読めるんですか！？〉

〈俺に不可能はねぇ〉

〈何なんですかそれ！？　理由になってないですよ！〉

〈冗談だ。本当はお前の心の声はこっちにある水晶から、全部聞こえてんだよ〉

〈……えっ？　……えぇぇぇぇ！？　初耳ですよそんなこと！？〉

〈当たり前だろ。今回からセットしたんだしな〉

〈こ、今回から？　はぁ、よかった……って、あんまりよくないか〉

〈何だテメェ、聞かれたら困ることでも思ってたのかよ？〉

〈い、いやぁ……そ、そんなことは……〉

〈視線が変な方向向いてやがんぞ〉

〈そ、そんなことより！　僕、一体どうしたら！？〉

〈アッハッハ！　任せるんだユアン君！〉

プツッ……ツーツーツー。

ふ～、危なかった……危うく“愛の神”の戯言を訊くとこだった……。あ……これも聞かれてるのか……まあいいや……。

「あ、あの？」

「あ、うん。えっと……」

しまった……結局衝撃の事実だけ訊いて、神話を切っちゃった……。ああもうどうすれば……！　うぅ……もうどうにでもなれ！

「い、いいよ！　ただし、敬語は禁止ね！」

「「は、はい！　ユアン兄さん！／ユアンお兄ちゃん！」」

２人は嬉しそうに元気よく返事をした。ユアンは少しくすぐったいような感覚を覚えたのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ここは神々が犇めく神か（ｒｙ

「ゆ、ユアン君が……」

“愛の神”が戦慄するような表情を浮かべている。

「反抗期に突入した！！？」

その衝撃の事実に、“愛の神”に凄まじい雷が全身を巡る。

プス……プス……プス……。

そして黒焦げになった。

「ってオイ。本当に撃つか？　“雷の神”？」

「クリウニヤハヒスキチニウ」

「【きらいなものはしかたない】か……そうは言ってもなぁ……まあいいか」

結局どうでもいい扱いの“愛の神”だった。“太陽の神”はそう言うと、面倒くせぇっといった感じに、ふあぁ～っと欠伸をすると、その場に寝転がった。

「ねぇねぇ、遊び道具出してよ～」

「僕も僕も～」

「ボックも～」

「うっせぇガキ！　集るな！」

別の場所では、“シスコンの神”、“ショタコンの神”、“地の神”が“遊具の神”に集っていた。ていうか“遊具の神”も見た目ガキである。

「ねぇねぇ出してよぉ」と“シスコンの神”が“遊具の神”の肩を揺すりながら訊く。

「イヤだね。オレは無駄に『創造力』を使わねぇんだよ」

「ユアンはあんなに使ってるよ？」と“ショタコンの神”が言えば、「そ～だよ～」と“地の神”が賛同する。

「アイツの『創造力』とオレの『創造力』を一緒にすんな！　あんなに出したら倒れるっつうの！」

しかし、子供たちの願いは、中々“遊具の神”を動かさない。そ

れに子供たちは不平不満を言い連ねる。

「オイ“太陽の神”！　何とかしてくれ！」

「テメェで何とかしやがれ、俺に子供のお守りを押し付けんな」

「オレのセリフだ！　オマエこそオレに押し付けるな！」

「他の奴がいねぇんだ。テメェくらいしかいねぇだろ」

「ふざけんな！　だったら“雷の神”がやれば……！」

「コイツに出来ると思うか？」

「ドクニウ（できない）」

「……」

そう言われたら、実際その通りな気がして、なんの言い返しも出来なくなり、仕方なく子供たちと遊ぶ“遊具の神”がいた。

「あらぁ、こんなところに暇そうな子がいるわね」

「な――ッ！　テメッ！？」

「もう、暴れないの。ちゃんと面倒見てあげるから」

「ウッセェ離せ！」

突如として現れた妖艶そうなお姉さん。銀色の綺麗な長髪。見た目年齢――そげぶ！？――すいません、そげぶされました。彼女は“狼の神”である。“太陽の神”を後ろから、ホールドしている。

「は・な・せ！　オラァ！！」

「もう、そんな暴れなくても取って食いやしないわよ」

「嘘ついてんじゃねぇ！　取って食う気満々だろうが！」

「バレちゃった？」

「ざけんな！　いいから離せ！」

“太陽の神”は無理やり“狼の神”の拘束を外す。

「もう、そんなに激しくしたら……ダメじゃない」

「無駄に意味深な発言すんじゃねぇ」

「あら、いいじゃない。ワタシの発言で青年たちが、元気になってくれるなら、それは素晴らしいことよ」

「ぜんっぜん素晴らしくねぇよ」

“狼の神”の発言は、“太陽の神”によって、全力で否定されたのだった。

第十話　僕……シグナムさんに言いたいことが……（前編）（後書き）

やっとフォワード陣とユアンが絡んだか……。
どうも混沌の使者です。

一応、次の話は考えてあるので、後は筆が乗れば……イケる！

コ【今回もその状態で遅れたがな】

人の揚げ足を取るな。

「……（ジュジュジュ～）」

……何を揚げてるのかな？

コ【豚足】

揚げんなよ！　しかも何で豚足か！

コ【人足の方がよかったか？】

なわけあるかぁ！　もっと悪いわ！

コ【散れ】

脈絡がねぇこと言うじゃねぇ！！（ダーッ！）

「……（ピューッ！）」

第十話　僕……シグナムさんに言いたいことが……（後編）（前書き）

もうホントごめんなさい……。

1ヶ月以上も投稿できなかったとは……すいません……。

しかも、あんまり納得いく出来じゃなかったり……ちくしょう……。

でもこれ以上待たすわけにもいかないので、投稿します。

楽しんでいただけたら嬉しいです。

では、どうぞ。

第十話　僕……シグナムさんに言いたいことが……（後編）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

あれから、ユアンはフォワードのみんなと別れ、シグナムを探していた。

――やっぱり謝らないと。よくよく考えたら、せっかくシグナムさんが、僕に遊ぶ誘いをしてくれたのに、ぶち壊すような真似しちゃったんだもんな。それは怒るよ。しっかり謝ろう。

微妙に論点がずれているユアンは、シグナムを探して、右往左往するのだが、中々見つからない。

「本当に見つからないな……もしかして、隠れてるのかな……ハッ！？　まさか……」

――今度はここ機動六課宿舎で、前回の雪辱戦の第2ラウンドを始めようっていうことか！？

「シグナムさん……ホントに遊ぶのが好きなんですね。わかりまし

た、受けて立ちます！」

完全に論点がずれたユアンが、そこにいた。

一方シグナムの方は――

――私が遊ぶのが好き？　受けて立つ？　何を言っているんだあの男は……？

ユアンの言葉がよくわからず、疑問符を浮かべていた。只今、監視中である。

どうやら、大分落ち着いたようで、ユアンを見ていても平気になったシグナム。寧ろ見ていたい……。

「い、いや、そんなはずはない。これは監視だ監視」

そう自分に言い聞かせるシグナム。

こうしてユアンＶＳシグナムのかくれんぼ第２回戦が始まった。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

――さて、シグナムさんはどこに隠れてるだろう……。

ユアンは建物内というのもあってか、ゆっくりと歩きながら探している。
だがその足取りは軽く、非常にウキウキ気分だというのが分かる。
それは鼻歌を歌うほどに。
そんな上機嫌なユアンは、ふとあることを思い出した。

――そういえば、僕の『世界創造』は由来に関係したのが、多いんだったっけ……。

そんなことを思い、ユアンは『かくれんぼ』の由来を思い出す。

――う～ん……つまり、女性が男性に恋をするってこと？　違うな。つまり相手が好きになるってことだよね。うん、絶対違う。だってシグナムさん、僕の顔見ないほど怒ってたし。きっと好きだったら、ずっとくっついてきたりするだろうし。“愛の神”みたいに。

どこまでも勘違いの激しいユアン。
それも“愛の神”の影響によるところだろう。
“愛の神”のユアンにくっつく行動。これが、ユアンに愛の表現だと勘違いさせてしまったのだ。いや、別に間違いではないが、そ

の一択ではない。
しかし、何度も言うようだが、ユアンはまともに接したことがあるのは、“愛の神”のみ。
そういう思考になっても、おかしくはない。
だが、今はそんなことを考えている場合じゃないな、と思い直し、シグナムを探し始めた。

そんなシグナムは――

パソコンルームの方で仕事をしていた。
実は、先程まで尾行をしていたのだが、そこにザフィーラが現れたのだ。
今までは、フォワードと一緒に入院していたのだが、どうやらフォワードと共に、退院してきたようだ。
本当なら、歩くのも辛いくせに。
まあ、それを指摘しても、ザフィーラは決して、苦しんでいるというのを口に出したりはしないだろうが。
それはさておき、やってきたザフィーラに「事情は主から聞いている。後は我がしよう」と言われたので、今はこうしてデスクワーク中。
本来デスクワークは、好きではなくあまりやらないシグナムだが、今はとにかく事後処理で、書類整理が大変なのだ。
猫の手も借りたいほどである。
ハァ……、と自然と溜め息が漏れる。

――ユアンは何をしてるだろうか……。

今自分が考えたことを思いだし、シグナムは顔を真っ赤にして、俯いた。

――重症だな……何故こんなにも奴のことが気になるのだ……。わからん……ムシャクシャする……こういうときは、剣を振っていたいが……。

そう思いながら、仕事の量を見て、また溜め息を漏らす。

「どうかしたんですか、シグナム副隊長？」

そこにシャリオ＝フィニーノことシャーリーが、シグナムに話しかけてきた。

まあここまで様子がおかしいシグナムである。

そこで働いている局員達は、チラチラとシグナムの方を見てはいたのだが、話しかけられたのはシャーリーだけだったようだ。

「ああ、いや、すまない。なんでもない」

だがシグナムは、多少焦りながらも、いつもの調子でそう言って、パソコンの方に向かった。

シャーリーは不思議そうに首を傾げながら、いつもの感じに戻ったシグナムを見て、まあいっか、と思い、自分も仕事に戻った。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

ところでユアンはというと――

「まよ……った……！」

その事実に戦慄していた。
ユアンはこの宿舎に来てから、行動するにしても一定の地区しかしてなかったため、ウロウロしていたら、ここがどこだかわからなくなったようだ。
ユアンは、うぅ……、と涙目になりながら、「ここどこ～？」と情けない声を出していた。

――うぅ……シグナムさんがここまで策士なんて……この宿舎をフィールドにすることで、まだ地理感のない僕と遊びで、タメを張るなんて作戦を……！

それは大いなる勘違いである。
だがシグナムが遊びを仕掛けてきていると思っているユアンには、まったく届かない言葉だろう。
ユアンはキョロキョロと辺りを見回しながら、歩いていく。

――それにしても……何か忘れてるような……。

そんなことを思いながら、ユアンが歩いていると、何か大きめの部屋のようなものを見つけ、なんの部屋だろう?、と思い、覗いてみた。

するとそこにはパソコンが大量に置いてあり、そこで人がカタカタと指を動かし、何かをしていた。

そこに一際目立つピンク色の髪を見つけた。

それを見つけたユアンは、パァッと喜色満面となり、トコトコとその髪の元へ向かう。

その時、その部屋はその見慣れぬ少年に、若干だが周りがザワザワし出す。

それにピンク髪の女性――シグナムが、何だ?、と思い、顔を上げる。

顔を上げて、横を見ると――

「お前……」

ユアンが若干涙目になりながらも嬉しそうな顔でいた。

「シグナムさん見つけた〜〜〜〜!!」

「キャァァァッ!?」

そのユアンは、安心感やら感激やらが、ごちゃ混ぜになり、シグナムに急に抱きついた。
シグナムは驚きのあまり、彼女らしからぬ甲高い悲鳴を上げた。
それにそこで働いている全員が、ギョッとして振り向いた。
とりあえず、シグナムは羞恥に顔を真っ赤に染めて、ユアンの手を握り、この場を去った。

シグナムはとにもかくにも今の自分の顔が見られたくないので、自らの部屋にユアンと共に入った。

「はあはあ……」
「あの……シグナムさん？」

何となく鬼気迫るシグナムに、ユアンはおずおずと名前を呼ぶ。

「えぶっ！」
「何のつもりだ……！」

そのユアンの頭を床に叩きつけたシグナムは、顔を真っ赤に紅葉させて怒っている。

「え、えっと、その、いきなり抱きついたのは謝ります！　すいませんでした！」

シグナムはまあ話くらいは聞いてやるか……、と思い、手を離し、部屋の奥に行き、ベッドの縁に腰掛ける。
それにユアンも続き、シグナムが座るベッドの前にちょこんと座る。

「それで一体どうした？」

シグナムは外面は落ち着いていた。
この感情の変化にも慣れたみたいで、なんとなくだがこのユアンと会っているときのドキドキ感が、寧ろ心地いいというのか、なんというのか、とにかく外面だけ見れば、以前のシグナムに戻った。

「あの……シグナムさんとかくれんぼしてたら、迷っちゃって……」
「ちょっと待て。いつ私がお前とかくれんぼをした」
「えっ？」

ユアンが何言ってるんですか？、という目でシグナムを見る。
寧ろお前が何言ってるんだといった状況なのだが、ユアンは全く気付かない。
ユアンの頭はすでに脳内変換が為されており、シグナムがユアンに再戦を申し込んだという事象が起きている。
だがシグナムからしたら、そんなことはした覚えがないわけで、ユアンと同じ目をして返した。
そのシグナムの目に気づいたユアンは、首を傾げる。

「あれ？　シグナムさんがかくれんぼをしようって、言ったんじゃ……？」
「いやいや、私はそんなこと言った覚えはない」
「「？」」

お互いの顔を見て疑問符を浮かべる2人。
だが、シグナムはすぐに目線を外す。いくら慣れたとはいっても、恥ずかしいものは恥ずかしい。
まあ、その行動は再びユアンに、やっぱり怒ってる……、ということを助長させているのだが。

――何かおかしいな？　あれ？

ユアンは頭に大量の疑問符を浮かべながら、腕を組んで記憶を順に思い起こしていく。

――ん～……ん～……ん？　……あぁ……。

思い出していく内に、そういえば言われてなかったな……、と1人納得し、うんうんと頷く。
シグナムはそんなコロコロ表情が変わるユアンを見つめる。

――何故……こんなにも気になるのだろうな……。

シグナムはポーッとしながら、自然と手が動き、ユアンの頬に触れる。
それにユアンが「えっ？」っと声を上げる。
シグナムは未だポーッとして、ユアンという存在を確かめるように、ユアンの顔をなぞる。
ユアンはくすぐったいのか、時折喉を鳴らしていた。
端から見ると、主人になつく猫のようである。
そこでしばらくやっていたシグナムが、突然ハッと声を上げ、慌てて手を放し――

「な、何をする！？」

やっていたのはシグナムの方なのだが、何か認めたくないのかユアンがやったような物言いをする。
それにユアンは、僕！？、と自分を指差し、戸惑うのだった。

「いや！　今のはシグナムさんから……！」

「えぇい！　うるさい！　き、きき貴様が悪いのだ！？」

それから、何か色々と言い合い、終わった頃には2人して、ハァハァと荒い息をしていた。

「も、もうやめませんか？　このままじゃ平行線ですよ」

「そうだな」

とりあえず、言い争いは終わる。
というより、まず何を言いあわなきゃいけないのかを把握しよう2人とも。
一向に噛み合わない2人は、何を話せばいいかわからず、お互い黙ってしまった。

――あ……れ？　僕、何を言おうと思ったんだっけ？

当初の目的を忘却の彼方に、追いやったユアン。

〈謝ろうと思ったんだろうが〉

〈“太陽の神”？　あ！　そうでした。あれ？　何で僕の……〉

と言ったところで、そういえば心が読まれてるんだった……、とずーんとしながら、思い出す。

〈いやぁ、お前おもしれぇなぁ。もっと早く設置すりゃよかった〉

〈止めてください……〉

心の中で、涙を流しながら、そう呟いた。
すると回線が切れた。
ハァ……、と心中でため息を漏らしながら、シグナムに目を向ける。
それに一々ドキッとなりながら、シグナムはユアンをまっすぐ見つめる。

「あの……僕……シグナムさんに言いたいことが……」

「な、何だ？」

沈黙を破ったユアンは、そう言って切り出す。
シグナムは何だか無駄に、ドクドクと脈打つ心臓を静ませながら、訊く。
そしてユアンから言葉が発せられる。

「ごめんなさい！」

と、ユアンが頭を下げた瞬間、し～んと辺りが静まり返った。何の音もしない。ただただ静寂が辺りを埋め尽くした。

――なんだ……この……どうにもやるせない感じは……。

そんな中シグナムは、ユアンの言葉の真意を探る。
しかし、どうにも心が落ち着かず、考えが全く纏まらない。

「僕！　せっかくシグナムさんが遊ぼうって言ってくれたのに、最後には……その……不快な思いをさせちゃって！　その、ごめんなさい！」

そんなことで……、と何かイラッとこめかみをひくつかせ、更によくよく聞けば、別にシグナムは遊ぼうなど言っていない。その事で更にこめかみをひくつかせ、また、不快な思いをさせた、ということは、この妙な感覚はやはり貴様のせいか、と再確認し、更にこめかみをひくつかせると、すでに限界にきたシグナムは、ダンッと立ち上がった。
ユアンは顔を上げ、ビクッと体を震わせる。

「貴様は私に何をした？」

いつの間にか、起動したレヴァンティンを突き付けながら、訊くシグナム。
ユアンはそれに手を上げて、無抵抗のポーズ。

「いやぁ、その……なんというか……具体的に何をしたかは、僕にもわからないみたいなぁ……」

そっぽを向いて気まずそうに言うユアンは、スッゴク怖がっていた。

何故なら、目の前のシグナムは、目をギラつかせ、物凄い覇気で、レヴァンティンを突き付けているからである。
下手なことを言えば、斬られそうだ。

「まあいい……今は貴様の根性を叩き直したい気分だ。表に出ろ。扱きあげてやる」

「で、出来れば、遠慮したいなぁ……なんて……」

しかし、言いかけて、シグナムにギロッと睨まれたユアンは、「……行きます……」と言って、シグナムの後をついていった。
それから、ユアンは訓練スペースまで連れてかれ、走り込みやら、腕立てやらをやらされ、昼頃に解放されたのだった。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

「どういうことなんやこれ？」

はやてが戦慄するように呟く。
その顔は驚きというか、どこか信じられないといった感情が、見え隠れした。

「私にもわからないわ。あなたが来る少し前に、急に私の『預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）』が発動したの」

それに答えるのは、聖王教会・教会騎士団所属の騎士カリム＝グラシアである。

「……なんにしてもこの内容は……！」

「ええ、正直馬鹿に出来ないわね」

その内容を見た2人は、揃って苦い顔をする。

▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽▽

邪なる創造の化身が、舞い降りし刻、世界は混沌へと向かう。

創造の化身は、更に創造の化身を呼び込む。

それは肥大化し、やがて世界に戦乱を巻き起こす。

その戦火は世界を滅ぼし尽くす。

大地の塔は虚しく焼け落ち、数多の海を守る法の船も同時に崩れ

落ちる。

第十話　僕……シグナムさんに言いたいことが……（後編）（後書き）

今回は神界の話はなし。
どうも混沌の使者です。

まあ、今回は神界の話がなかったんですが、次回はちゃんとある予定なので。

一応次回からは、新章に入る感じになると思います。

笑いがあって、シリアスがあるような話が書けたらいいなぁ、なんて思ってます。

とりあえず、これからテストがあるので、８月中旬くらいまで、投稿できないと思います。

何かまた待たせてしまうことになりそうですいません。

それでは、この辺で。

また会いましょう～♪

第十一話　僕のせい……？（前書き）

何ヵ月ぶりだろう……とにかくすいません。

ペースは遅いかもしれませんが、これから更新開始です！

ではどうぞ！

第十一話　僕のせい……？

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

《予言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）》により、もたらされた予言に、カリムとはやては、向き合って話し合っていた。

「これって……」

「ええ、管理局だけじゃないわ。世界さえも滅ぶ……」

はやてはその予言に、頭をガシガシと掻きむしる。

「ああもう！　どうなっとんねん！　つい先日、驚異を払ったばっかやで！　それやのに！」

「落ち着いて、はやて。これが当たるとは限らないわ。何か兆候があったわけでも――」

と、そこで、はやてが気まずそうに目を逸らした。

「まさか……」

「実はその事で、こっちに来たんよ……」

はやては、その予言を聞いて、すでにある程度の予想はついていた。

思い当たる節がありすぎたのだ。

とりあえず、はやてはここ最近あった出来事をカリムに話した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

時間は昼過ぎ。

ご飯を食べ終わり、シグナムさんに鍛えられたことで、疲れたのでぐで～っとしながら歩いていた。

そんな状態で思うのは――

――何か忘れてる気がする……。

どうにも、何かを忘れている気がする。

だが、何か思い出せない。何だったのだろうか？

「う～ん……気のせいかな……？」

「ユアン！」

その時、後ろから声がした。
この声はヴィヴィオかな？　と思い、後ろを向いた瞬間――

「ぐふっ！？」

鳩尾にダイビングヘッドバッドを喰らった。
ユアンはあまりの威力に一瞬走馬灯のようなものが見えた気がしたが、なんとか意識を取り戻した。
そして、自分の腹の辺りを見ると、やはりそこには金髪の少女――ヴィヴィオがいた。

「約束！！　破った！！」

そのヴィヴィオの言葉で思い出す。
そういえば……、と。確かお手玉を教えてあげる約束をしていたことを。
しまった……、と思ったところで、時すでに遅し。
ヴィヴィオは今にも泣きだしそうである。

「ご、ごめんヴィヴィオ！　その……いろいろあって……」

「いろいろって？」

ヴィヴィオの涙目の上目遣いからの問いかけに、ユアンはどう言ったものかと思案する。
う～ん、シグナムさんに扱かれてたから？　でも、元々僕のせいだし……こう言うと、シグナムさんが悪いみたいになっちゃう……。

〈困っているんだね！　ユアン君！！〉

〈いいえ、まったく〉

ユアンの顔から感情が消え去った。
しかし、神話をしてきた“愛の神”には関係なし。

〈ああ、いいよ……！　その蔑んだような瞳……！　ぞくぞくする……！〉

〈僕の姿は見えてないでしょう！　想像だけで言わないでください！〉

結局感情を引き出されるユアン。
なんとなく悔しいと思うのだが、つっこまずにはいられなかった。
そんな無言で百面相するユアンに、ヴィヴィオは、う～、と唸って睨む。
そのヴィヴィオの様子に、流石に“愛の神”に構ってられないユアンは、完全無視することを決めて、何か方法はないかを考える。
くぅ……どうすれば……ヴィヴィオの機嫌を取り戻すには――

〈この僕にかかれば、想像だけでユアン君のあんなことやそんなことを現実とするなんて簡単な事さ！〉

ここは遊び道具を出して、それで一旦場を収めるか……？

〈無視かい？　無視なんだねユアン君！　それもいい！　いや、それがいい！〉

いや、でも、それじゃあ根本的な解決になってないし……。

〈ああ、なんて甘美なんだ……糖尿病になってしまいそうだよ……〉

……う〝ん！　えぇっと、えぇっと……。

〈その甘美な調べは、僕の魂を震わせる……ああ、なんて素晴らしいんだ……これが愛なんだ……！〉

「〜〜ッ！　だあ！　もう！　うるさ〜〜い！！」

「！？」

色々と考えているのに、ごちゃごちゃと煩い“愛の神”を黙らせ

るつもりのユアンだったが、それは思い余って外へと放出されてしまった。
そして、それはヴィヴィオに怒鳴ると同義の事象である。
怒鳴られたヴィヴィオは当然涙目になる。

「だって……だってユアンが……ひう……約束……ヒクッ……破る……うわ～ん！」

「ご、ごめんヴィヴィオ！！　その、違うんだ！　違くて……えと……その……」

盛大に泣き出したヴィヴィオに、ユアンはもうたじたじだ。頭が混乱して何も浮かばない。もう泣きたい……。
そんなユアンに救いの手が。

「ど、どうしたの？」

どうやら走ってきたのか、少し息切れしたアイナさんが来てくれた。
アイナさんはヴィヴィオが、「ユアンが約束破った！」と言って、部屋を飛び出したので探していたのだ。
そして今、やっと見つけたわけだが、何故かヴィヴィオは泣きわめき、ユアンは涙目という状況。
流石に訳がわからない。
しかし、そんな少し混乱しているアイナさんより、ユアンやヴィヴィオの方がよっぽど混乱していた。

2人は現れた救いの女神に、うわ～ん！　と泣きながらも抱きつく。

「え、えと……ほら、落ち着いて。何があったの？」

少し戸惑いながらも、泣き止むように2人の頭を撫でてあやすアイナさん。どうして2人とも泣いてるの？

とりあえず、2人をあやしながら、ここではちょっと恥ずかしいので、自分の部屋まで連れていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ここ（グシャ

「うるせぇ。で、もう一回言ってみろ」

“太陽の神”はイラついているのか、“眼鏡の神”に眼くれた。

“眼鏡の神”ははぁっと溜め息を吐いてから、もう一度聞こえるように話す。

「だから！　“邪神”が逃げ出しました」

「……で？　見張りしてたやつは？　まさか寝てたんじゃねぇだろ

うなぁ……？」

その言葉で“眼鏡の神”が視線を逸らした。

「ほほぅ……？　そいつらどこにいる？」

「さあ？」

のしのしと歩きだし“太陽の神”は去って行った。
再びはぁっと溜め息を吐いた“眼鏡の神”は、本題に入るかと言った感じに話し出す。

「それでどうしますか？」

今この場にいる皆に問いかける。
邪神をどうするか？　と。

「別にいいんじゃないのぉ？　邪神が次元世界に逃げたところで、私たちに害はないんだから」

「そうにゃ。大体どうせ滅ぼすつもりなら、邪神がやったところで同じにゃ」

“狼の神”がダルそうに適当に発言すれば、“猫の神”もそれに同意するように頷く。

「待ちたまえ君たち！　愛を求める僕たちがそんなことを言ってはいけない！」

『それはお前だけだ』

「あはぁ？」

『脱がんでいい』

“愛の神”のくだらない戯れ言を皆でツッコミ、また何か言いそうだったので、口を塞いで簀巻きにした後投げ捨てた。

そんな“愛の神”を見て、“コンプレックスの神”が困ったように溜め息を吐く。

「もう……懲りないわね……」

「“コンプレックスの神”……貴女にも困るものがあったんですね」

「それはね……私にもあるわよ。“愛の神”に、ユアン君が嫌がることしないって注意してるんだけど、止めてくれなくて……」

「別にいいんではないですか？　彼は“愛の神”の系統。彼をどうしようと“愛の神”の勝手でしょう？」

「そうなんだけど……」

はぁ、と溜め息を吐き、何かを考え始める“コンプレックスの神”。

“眼鏡の神”はその会話を終えると、再び皆に顔を向ける。

「それで。どうしますか？」

「決まってんだろ！」

バンッと現れたのは“太陽の神”。どこかスッキリした顔をしている。おそらく、寝ていた奴等に仕置きをして来たのであろう。冥福を祈ろう。

「俺らでぶっ飛ばす！　次元世界も壊すにしたって、俺らがやんねぇでどうするよ！　邪神なんぞにやられてたまるかよ！」

「ま、貴方ならそう言うと思いましたよ。すでに“探偵の神”の系統に調査をさせています」

「よくわかってんじゃねぇか！」

パンッと拳を打ち付け、殺る気満々な“太陽の神”。

もはや、ただ暴れたいだけじゃないだろうか？

そこで“コンプレックスの神”が手を上げた。

「いいかしら」

「あ？　なんだよ？」

「ユアン君のところに１人送らないかしら？」

「……そうですね……邪神は私たち神に多少なりとも恨みがあるでしょうしね」

「それじゃあ……」

第十一話　僕のせい……？（後書き）

どもども～。

今回は短い上に、時間もかけて……重ね重ね申し訳ないです。

……おかしいな。この辺であの子が来る気がしたんだが……。

そういえば、前回も来てませんでしたな……何をしておるやら……。

ではでは♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9551r/

魔法少女リリカルなのはStS〜神々の遊び〜

2012年1月14日00時58分発行